

# 「浪速オヤジキッド」

(三百字詰め原稿用紙三百枚)

登場人物

鈴木ありさ（十）小学五年生

荒瀬洋二（三八）大工

鈴木里美（三八）ありさの母

木村浩介（三二）里美の恋人

木村美津子（五八）木村の母

木村修二（六十）木村の父

丸山（五六）大工

迫田（三八）大工

なみ（十）ありさの友達

焼き鳥屋の女将

ウエイトレス

不動産屋の社員

なみの父親

なみの母親

鈴木政和（三十）ありさの父（写真）

① 大阪・道頓堀

カップルや女の子同士など行き交う人々。

② 大阪・通天閣・全景

ありさN「大阪では『キタ』言うのと梅田の辺りを、『ミナミ』言うのと道頓堀や通天閣がある難波の辺りをいうそうや」

③ 天王寺駅・全景

④ 同・阿倍野ハルカス・全景

ありさN「場合によっては天王寺駅の周辺も『ミナミ』に含まれることもあるらしい。最近なんや高いビルができてこの辺も有名になった」

⑤ 同・駅前

路面電車が行き交う。

ありさN「うちの家は大阪の阿倍野区いうところにある。JRの環状線、天王寺駅から歩いたら二十分ちよつと。路面電車に乗ったら二駅目の『松虫』いう駅で降りて、歩いて二分ぐらいのところにある」

⑥ 鈴木家・全景

二階建ての小さな家。

⑦ 同・居間

テレビの画面に競馬場のスターター席が映っている。

それを少し離れたところで食い入るようにして見ている鈴木ありさ（十）。  
ありさN「うちは鈴木ありさ。この四月に小学校五年生になった」

テレビの画面ズーム。競馬場の観客席が映る。

⑧ 阪神競馬場・観客席

満員の観客席

客が手拍子をし、歓声をあげている。

⑨ 同・スターター席  
スターターが旗を振る。

⑩ 同・観客席  
歓声をあげる観客。

⑪ 同・場内  
馬が一斉にゲートから出て走り出す。

⑫ 鈴木家・居間  
ありさがテレビを見ている。  
アナウンサーの声「第××回桜花賞、十八頭の牝馬が一斉にスタートいたしました」  
テレビに映っている馬が列を成して走っている。

ありさが身を乗りだしてテレビを見る。  
ありさ「行け！」

⑬ 同・庭  
小さな庭に、物干しが二本。  
鈴木里美（三八）が洗濯物を取り込んでいる。

⑭ 阪神競馬場・ゴール  
馬が次々ゴールする。

⑮ 同・観客席  
歓声を上げる観客や馬券を放り投げる観客。

⑯ 鈴木家・居間  
ありさがテレビを見ている。  
テレビの画面に馬が走っている姿が映っている。  
アナウンサーの声「一着はヤマトナデシユ」  
ありさ「あーあー、負けた」  
ありさ、その場に横になる。  
里美が洗濯物を手に入ってくる。洗濯

物をカーペットの上に置いて座る。

里美「また競馬？」

里美が洗濯物を畳み始める。

ありさ「うん、今日は負けた」

ありさ、起き上がって洗濯物を畳み始める。

里美「小学生が競馬やなんて……」

ありさ「大丈夫、約束は守ってる。G1レースだけしかしてへんし、一回千円までしか掛けてへん」

里美うなづく。

里美「ありさ、今日、何食べたい？」

ありさ「うーん、トンカツ」

里美「じゃあ、あとで買うてくるわ」

ありさ「うちが作る！」

里美「たまにはええやん。揚げもんは作るよ  
り買<sub>い</sub>うた方が……。二人分なんてめんどろ  
やし……」

ありさ「そんなことない。うちで作った方が  
安上がりやし、何よりやっぱ揚げたてが一  
番や。それにいっぱい揚げて冷凍しといた  
らええやん。チンしてお弁当のおかずにも  
なるし」

里美「わかった。じゃあ、これ終わったら買  
いに行くけど一緒に行く？」

ありさ「どこのスーパー？」

里美「遠くまで行くのめんどろやしそのス  
ーパー谷山」

ありさ「あかん、豚肉は今池駅の近くのファ  
ミリースーパー方が安い。日曜日は肉の特  
売日なんや」

里美「けど買うのは肉だけと違うし……キャ  
ベツや、あと牛乳も切らしてるし……」

ありさ「じゃあお母ちゃんは谷山行って。う  
ちはファミリーへ行って肉買ってくる」

里美「何もそこまでせんでも……」

ありさ「ちりもつもれば……や」

里美「時は金なりとも言おうよ」

ありさ「今の我が家は時より金や。お母ちゃ  
んは忙しいかもしれないけど、うちには時間

たつぷりあるんやから」

里美「はいはい。言い出したら聞かへんのやから……」

洗濯ものが畳み終わる。ありさが立ち上がる。

ありさ「じゃあ、行ってくる」

里美「自転車気いつけや。(冗談っぽく) 怪我したらそれこそ病院代かかるんよ」

ありさ「わかってる」

ありさ、部屋を出て行く。

### ⑰道(夕)

車がぎりぎり対向できるぐらいの道。ラフな格好をした荒瀬洋次(三八)がタバコを吸いながら歩いている。

### ⑱道(夕)

ありさが自転車に乗っている。買い物かごにエコバック。中に豚肉やスパゲッティ、缶詰が入っている。ありさの少し前を荒瀬が歩いている。

ありさ「あつ……」

ありさ、自転車をこぐ足を速める。自転車が荒瀬を追い抜き、荒瀬の少し前で急停車する。

荒瀬「おう、びっくりさせんなや」

荒瀬、微笑む。

ありさ「人は右側通行やで」

荒瀬「こんな狭い道で右側通行もくそもあるか」

ありさ「狭い道やしちゃうんか？ 広い道やったら歩道あるし左側通ってもええやん。

それに歩きタバコは危ないで」

荒瀬「はいはい」

荒瀬、かまわずタバコを吸う。

ありさ「パチンコの帰り？」

荒瀬「アホ、仕事の帰りや」

ありさ「日曜やのに？」

荒瀬「このところ雨で休み多かったからな」

ありさ「ふうん。大変やな。まだあの高橋さ

んとかいう家なん？」

荒瀬「そうや」

ありさ「明日も？」

荒瀬「ああ。しばらくはな」

ありさ、自転車を降りて荒瀬と一緒に  
歩き出す。

荒瀬「今日、おしかったな」

ありさ「まあこんな日もあるわな。おっちゃんはどうやった？」

荒瀬「勝ったで！」

ありさ「ほんま？　いくら？」

荒瀬「二万ぐらい勝ったわ」

ありさ「ふうん。珍しいやん。けどそういうの、焼け石に水いうんやろ？」

荒瀬「うるさいわ。そんなこというともう一緒に買うたらんぞ」

ありさ「そういうことはちゃんとお金払ってから言うてや。今、十五万ぐらい貸しあるんやで」

荒瀬「そんなに？」

ありさ「何なら今度手帳見せよか？」

荒瀬「わかった、わかった信用しとる」

ありさ、荒瀬交差点まで来て足を止める。ありさ自転車のまたがる。

ありさ「ほなな」

荒瀬、タバコを指に挟んだまま、ありさに向かって片手を挙げる。

ありさが自転車で走っていく。  
バックにサーモンピンクの夕焼け雲。  
タイトル「浪速オヤジキッド」

### ⑱ 鈴木家・台所（夕）

ありさがトンカツを揚げている。

その横で不安そうに立っている里美。

里美「気いつけや」

ありさ「大丈夫」

ありさ、トンカツを揚げていく。

### ⑳ 同・居間（夜）

テーブルの上にトンカツ、キャベツの

千切り、茹でたブロッコリの載った皿と、玉子スープの入ったスープ皿が並んでいる。

ありさ「いただきます」

里美「いただきます」

ありさ、里美、トンカツを口に運ぶ。

里美「おいしい」

ありさ「せやろ？ 買うてきたやつよりおいしいやろ？ なあ明日荒瀬のおっちゃんと

こへお弁当持ってってええ？」

里美「えっ？」

ありさ「明日は始業式で午前中だけやし、せ

つかくトンカツ作ったし……」

里美「後で荒瀬君に電話して聞いてみ」

ありさ「うん」

## 21 建設中の家・庭

荒瀬、丸山（五六）、迫田（三八）が木材に腰掛けている。

迫田、丸山がコンビニの袋からおにぎりを取り出して食べ始める。

荒瀬がお弁当箱を開ける。おにぎりや

トンカツ、卵焼きなどが入っている。

迫田「それ、ありさが作った弁当？」

荒瀬「うん」

丸山「上手に作ってるやん」

荒瀬「そうやな」

ありさ「（タツパを渡し）これ、丸山のおっ

ちゃんと迫田のおっちゃん分。トンカツ

だけやけど……」

丸山「ありがとう」

丸山と迫田が食事をし始める。

迫田「けど、えらくなつかれてるな」

荒瀬「父親がおらへんからな」

荒瀬、トンカツを口に運ぶ。

丸山「どうせやったら里美ちゃんと結婚して

ほんとの父親になったらええんや」

荒瀬、むせる。

荒瀬「アホなこと言わんといってくださいよ」

荒瀬、ペットボトルのお茶をラツパ飲



みする。

22××不動産会社・外観（夕）

23同・内（夕）

木村浩介（三二）と数人の男性社員がデスクワークをしている。

木村が立ち上がってカップを手に奥の方へ行く。

24同・台所

冷蔵庫と流しだけの小さな台所。

里美がカップを洗っている。

木村が入ってくる。

里美「あっ、一緒に洗うね」

木村「ありがとう」

里美、木村からカップを受け取って洗う。

木村「話してくれた？」

里美、水道の蛇口を閉め、水切りにカップをのせる。

里美「ごめん、まだ……」

木村「そう……」

25××スーパー・内（夕）

買物かごを手にありさが商品を見ている。

26××不動産会社・内（夕）

木村と数人の男性社員がデスクワークをしている。

カバンを手にした里美が奥の部屋から出てくる。

里美「お先に失礼します」

木村、社員一同「お疲れさま」

里美、外に出ていく。

27××スーパー・内（夕）

レジにありさが立っている。

店員が商品を機械に通している。

店員「千六百五十円です」

ありさ、千円札二枚を店員に渡す。

28 鈴木家・居間（夜）

ありさと里美が食事をしている。

里美「なあ、ありさ」

ありさ「なに？」

里美「今度の日曜なんやけど……」

ありさ「日曜、あつ、皐月賞や……おっちゃんに頼まな……あつ、ごめん、日曜がなに？」

里美「ううん、何でもない」

× × ×

× × ×

ありさがパソコンで競馬の出馬表を見

ている。

里美がその前で食事をしている。

29 ××小学校・校門く道（夕）

ありさが二人の小学生と一緒に校門か

ら出てきて歩いていく。

30 鈴木家・前（夕）

ありさが歩いてくる。

ありさ、足を止め、ランドセルをおろ

す。ランドセルの中から鍵を取り出す。

鍵を開け、中に入る。

31 同・玄関く階段（夕）

ありさが入ってきて階段を駆け上がる。

32 同・ありさの部屋（夕）

ありさが入ってきて床にランドセルを

置く。

小さなカバンを肩にかけ、部屋を出て

行く。

33 道（夕）

ありさが走っている。

34 公園（夕）

荒瀬がベンチに座り、競馬新聞を手に

赤鉛筆で馬の名前の所に印を付けている。

ありさがベンチの後ろからゆっくりと

荒瀬に近づく。

ありさ「おっちゃん、その馬こうへんで！」

荒瀬、びっくりした顔で振り向く。

荒瀬「お前か。びっくりさせんなや」

ありさ、ベンチの背もたれをまたいで

荒瀬の隣に座る。

荒瀬「そのおっちゃんっていう呼び方やめる

や！ まだ俺は独身なんやで……」

ありさ「でもおっちゃんはおっちゃんや！ 自

分の年考ええや」

荒瀬、新聞に目を向ける。

荒瀬「お前、何が来る思うんや」

ありさ、手を広げて荒瀬に差し出す。

ありさ「それよりおっちゃん借金返してや」

荒瀬「明後日のレースで取り返して返すって。

どれが来るか教えろや」

ありさ、荒瀬を睨む。

ありさ「教えろ？」

荒瀬「いや……教えてください」

ありさ「日曜は雨やで。おっちゃん新聞読ん

でへんのか？」

荒瀬「新聞なんか取るかいな。金かかんのに

……」

ありさ「競馬新聞やスポーツ新聞は買うのに

か？ そんなんやからお父ちゃんにお母ち

ゃんもってかれたんや。もともとお母ちや

んはおっちゃんの友達やったんやろ」

荒瀬「せや、小学校の時から友達や。家が

近所やったしな」

ありさ「お父ちゃんとは？ 友達違たん？」

荒瀬「お父ちゃんとはリトルリーグで一緒や

ったし小学校の時から知つとったけど学校

が一緒になったんは中学からや。中二ん時

に三人同じクラスやったんや。お母ちゃん

とお父ちゃんとは俺が紹介するまで面識は

なかったんやで。つまり俺がおらんかった

らお前は生まれてへんのか。感謝せえよ！」

ありさ「ふーん。ええように言うとするけど、結局お父ちゃんにお母ちゃんとられたんやろ。かつこわる！ まあおっちゃんとお父ちゃんやつたら誰でもお父ちゃん選ぶわな」  
荒瀬「うるさいわ！ 口のへらんガキやなあ  
∴それより一体何がくる思うんや！」

ありさ、新聞に目を向ける。

ありさ「スカイブルーは雨やと走らんからなあ∴∴。それに先行馬のいるレースはあれ  
るで。穴狙いや」

荒瀬「ほな、モミジマンジュウか？」

ありさ「アホ！ そんな変な名前の馬くるか  
いな。メジロサンダーや。あと、山田騎手  
もはずせへんしテイエムサイレンスやな」

荒瀬「じゃあ馬連で五、七やな」

荒瀬、新聞に印をつけながら、

荒瀬「お前の勘はよう当たるからな∴∴」

ありさ「勘とちゃう。ちゃんとデータ分析し  
てるんや。前に走ったレースもネットで見て  
チェックしてる」

荒瀬「小学生が競馬の予想するか、普通」

ありさ「競馬教えてくれたんはおっちゃんや  
んか」

荒瀬「そりやそうやけど∴∴」

ありさ「うちもメジロサンダーとテイエムサ  
イレンスの馬連と、あとメジロサンダーと  
ウイニングランの馬連も買うといて。五百  
円ずつ」

荒瀬「ああ∴∴せやけど、お前、そんなに金  
貯めてどないすんのや」

ありさ「生活のためや」

荒瀬「生活？」

ありさ「そうや。うちは母子家庭やからな。  
お母ちゃんが倒れたらおしまいや」

ありさ、立ち上がる。

ありさ「ほな、おっちゃん頼んだよ」

荒瀬「おお∴∴まかしとき」

ありさ、二、三步歩いて振り返る。

ありさ「はよお金返さんと利子増えんで！」

ありさ、笑いながら歩いていく。

35 喫茶店・内（夕）

里美と木村が座っている。

テーブルの上にコーヒーカップが二つ。

木村「まだありさちゃんに言うてへんの？」

里美「（うなづいて）なんかタイピング考えてたらなかなか切り出せへんの」

木村「けど……」

里美「分かっている。今日は必ず言うわ」

木村うなづく。

里美「ごめんな。私、母親やのどこかあの子に遠慮してるところがあつて……」

木村「なんで？ 思春期やっていうんやったらわかるけど、まだ小学生やろ？」

里美「父親がおらへんことにやっぱり引け目感じてるんかな」

里美、コーヒーを飲む。

36 道（夜）

荒瀬が歩いている。

荒瀬の前を里美が歩いている。

荒瀬、足早に里美に近づき、

荒瀬「今帰りか？」

里美、振り返り、荒瀬の顔を見て微笑む。

里美「うん。荒瀬君も？」

荒瀬「ああ、まあ……」

荒瀬、持っていた競馬新聞を後に隠す。

× × ×

荒瀬と里美が歩いている。

荒瀬「夕飯、毎日ありさが作ってんのやて？」

里美「うん……いいって言つとるんやけどああいう性格やしきかへんのよ」

里美、軽くため息をつき、

里美「いつの間にあんな子になつてしもたんやろ……」

荒瀬「なんでや。しっかりしたええ子やないか……」

里美「しっかりしすぎやわ。時々ついていけへん時がある……なんか遠い所にいってし

もたみたい……」

里美、心持ち顔を上げる。それをとりで見つめる荒瀬。

荒瀬「ちよつと責任感じるなあ。あいつ、学校の友達より、俺や俺の職場の奴と遊んだりすることが多かったから……」

里美「何言ってるの。荒瀬君がおらへんかったら私、一人でありさを育てることなんてできひんかったわ。感謝してる」

荒瀬「けどなあ。中身はすっかりおっさんになってもたしな。もうちよつと女の子らしく……」

里美「大丈夫。誰の子や思ってるの」

里美、荒瀬の方を見て微笑む。

荒瀬「そうやな。お前とマサの子やったな」

荒瀬、空を見上げる。空にボツボツと星が光っている。

### 37 鈴木家・台所（夜）

ありさがじゃがいもの皮を剥いている。

里美の声「ただいま」

里美が入ってくる。

ありさ「おかえり！ 今日肉じゃがやで」

里美「うん……」

里美、ありさの後姿をしばらく見た後、隣の居間に向かう。

### 38 同・居間（夜）

ありさと部屋着を着た里美が食事をしている。

ありさ「おいしい？」

里美「うん。おいしいよ」

里美、お茶を飲む。

里美「（湯飲み茶碗をテーブルに置き）なあ、明日仕事の後出かけてもええ？ 八時までには帰ってくるし」

ありさ「うん、ええよ。荒瀬のおっちゃんとも行くわ。せやお弁当持ってたろ」  
うれしそうにありさ。それを少し不安そうに見つめる里美。

ありさ「何作ろかなあ……」

里美「仕事の邪魔したらあかんよ」

ありさ「わかっとなるって」

ありさ、お茶碗を持って食べようとするが、里美が自分の方をじっと見ているのに気づいて動きを止める。

里美「なあ、ありさ。日曜にちよつと会ってほしい人がおるんやけど……」

ありさ「えっ？」

ありさ、茶碗をテーブルの上に置いて里美の方を見る。

里美「つきあってる人がおるんよ」

ありさ、生唾を飲む。

ありさ「再婚する気なん？」

里美「ありさがいって言うんなら……」

しばらく沈黙。

ありさ「別にかまへんで、再婚しても」

ありさ、箸を力強く握っている。

里美「ほんま？」

ありさ「けど、うちはここで一人で暮らす」

ありさ、御飯を勢いよく食べる。

里美「ありさ……そんなことできるわけないやろ」

里美、ありさをじっと見ている。

里美「明後日、一緒に食事する約束してるんや。とにかく、会っただけ会ってみて」

ありさ、無言で御飯を食べている。

里美「ありさ……」

### 39 同・ありさの部屋（夜）

六畳ほどの部屋。阪神タイガースのユニホームを着たキティちゃんのぬいぐるみや馬のぬいぐるみが棚に置いてある。

机に写真たてが置いてある。写真には笑顔の鈴木政和（三十）が写っている。

ありさが机に向かっている。

ありさ、引き出しから銀行の預金通帳を取り出す。

通帳の残高の所に十七万五千四百五十

六円と記帳されている。  
ありさ、通帳を閉じ、机の引き出しに  
戻す。

ノックの音。ドアが少し開いて里美が  
顔を出す。

里美「お風呂できたよ」

ありさ「（里美の方を見ずに）うん」

㊦同・居間（夜）

里美がテレビを見ている。パジャマ姿  
のありさが入ってくる。

ありさ「おさきい」

ありさ、部屋を出ていく。

㊦同・台所（朝）

ありさがフライパンでウインナーを炒  
めている。

テーブルの上におにぎりの入ったお弁  
当箱が二つ。

レンジの音。

ありさ、レンジからレトルト食品を取  
り出してお弁当箱に入れる。

㊦建設中の家・庭

荒瀬と丸山、迫田が高所で大工仕事を  
している。

ありさが紙袋を手に歩いてくる。

ありさ、荒瀬の方を見上げて、

ありさ「おっちゃん！」

荒瀬、足元が一瞬ふらつく。振り向い  
てありさの方を見る。

荒瀬「おまえなあ……その呼び方は辞めろっ  
て言っとるやろが……」

丸山と迫田が仕事の手を止めてありさ  
の方を見て微笑む。

迫田「おう！ また来たんか」

ありさ「うん。おっちゃんの弁当作ってきた  
ったんや」

ありさ、紙袋を高く上げる。

丸山「ほなそろそろ休憩しよか」



荒瀬、軽くため息をつく。が顔からは笑みがこぼれている。

### 公園・内

ありさと荒瀬がベンチに並んで腰掛け、弁当を食べている。

少し離れたベンチで丸山と迫田が弁当を食べている。

荒瀬「お前、こんなとこにきとらんと、友達と遊びに行ったらどうや？」

ありさ（おにぎりを食べながら）同じ年の友達とはどうも合わん。疲れる」

荒瀬「はあ……？」

荒瀬、軽く笑みを浮かべ、ペットボトルのお茶を手にとつて口に持つていく。

丸山、ありさと荒瀬の方を見て、

丸山「お前らほんとの親子みたいやな」

ありさ「せやろ。うちも本当はおっちゃんがお父ちゃんちゃうかと思うことがあるわ」

荒瀬、お茶をふきだす。

ありさ「もう、きたないなあ……」

荒瀬「お前がへんなこと言うからや」

ありさ「せやかて、うち、お父ちゃんには全然似てへんけど……」

荒瀬「そうやな。確かにあの美男美女の子供やとはどうてい……」

荒瀬が笑いながらありさの方を見る。

ありさが荒瀬の方を睨んでいる。

荒瀬「おい、冗談や。そんな怒んなや……」

ありさ、荒瀬の足を思いつき踏む。

荒瀬「いった！ お前、本気で踏んだな。何すんねん！」

ありさ「ふん！」

ありさ、おにぎりを手に取って食べ始める。

丸山と迫田が笑いながらありさと荒瀬の方を見ている。

ありさ「なあ、おっちゃん。うち、大工になるかな」

荒瀬「大工？　アホ！　そんな女になるもんちやうやろ」

ありさ「何でや。女のトラックの運転手かっておるんやで。女の大工がおつてもええやん」

荒瀬「けどなあ……」

丸山と迫田が競馬新聞を見て二人で話をしている。

ありさ、立ち上がって、丸山と迫田の方へ行く。

ありさ「明日は穴ねらいやで！」

ありさが丸山と迫田と楽しそうに話している。

荒瀬が心配そうにありさの方を見ている。

#### 建設中の家・前

ありさと荒瀬、丸山と迫田が歩いてくる。

荒瀬「ほなな。気いつけて帰り！」

ありさ「なあ、今日夕飯一緒に食べにいこ。

うちがおごつたるさかい……」

荒瀬「ええけど、お母ちゃんは？」

ありさ「今日は遅いんや」

荒瀬「そうか。じゃあ、終わったら家に向かえに行くわ」

ありさ「うん」

ありさ、嬉しそうな顔をする。

ありさ「ほな、しつかり働きや！」

ありさ、荒瀬の背中を叩く。

荒瀬がむせる。

ありさ、笑いながら歩いていく。

荒瀬、ありさの後姿を眺めている。

#### 45 焼き鳥屋・内（夜）

狭く古めかしい感じの店。

店のほとんどが年配の男性客。

ありさと荒瀬がテーブル席に向かい合って座っている。

テーブルの上にお茶の入ったグラス、

冷酒のビンと冷酒のグラス、焼き鳥ののった皿。

ありさ「フランス料理とかイタリア料理とか、もつときのきいた店知らんのかいな。そんなんやし女にもてへんのやで」

荒瀬「うるさい。ごちやごちや言うたらんと食べてみいや」

ありさ、焼き鳥を食べる。

ありさ「おいしい！」

荒瀬「せやろ。この焼き鳥は絶品や！」

荒瀬、焼き鳥を食べる。口の周りに少したれがつく。それを手でぬぐう荒瀬。

ありさ「きたないなあ……もつと上品に食べんと女に逃げられんで」

荒瀬「いちいちうるさいなあ……」

ありさ、冷酒の瓶を手にし、グラスに注ぐ。

荒瀬「おお、ありがとう……」

ありさ、グラスを手にして素早く中身をいっき飲みする。

荒瀬「おい、アホ！」

ありさ、渋い顔をする。

ありさ「はあ……」

とありさ、軽くため息をついて微笑む。

ありさ「一回飲んでみたかったんや」

荒瀬、グラスをひったくり、

荒瀬「ませガキが！」

荒瀬、グラスに冷酒を注ぎ、飲む。

45 鈴木家・居間（夜）

真っ暗な部屋に電気が点く。

おしやれをした里美がテーブルの上を目を向ける。

テーブルの上にメモが置いてある。それを手にする里美。

ありさの声「荒瀬のおっちゃんと夕飯食べに行きます。今日はおっちゃんの所に泊まります」

里美、軽くため息をつく。

「焼き鳥屋・内（夜）」

ありさと荒瀬が座っている。

テーブルの上に空になった皿が数枚。

荒瀬「おばちゃん、おあいそして！」

女将「はい」

荒瀬がポケットから財布を取り出す。

ありさ「うちが払う！」

ありさ、カバンから財布を取り出す。

荒瀬「アホ！ 子供に払わされるか！」

女将が荒瀬に近づく。

女将「四千円で……」

荒瀬、頷き、一万円札を女将に渡す。

女将、軽く会釈してカウンターの上のレジの方へ向かう。

ありさ、荒瀬の方をじっと見ている。

女将が戻ってきて、六千円を荒瀬に渡そうとする。

ありさがそれをひったくる。

荒瀬「おい！」

ありさ「心配せんでもおっちゃんの借金から一万円ひいといたる！」

ありさ、お金をカバンに入れると立ち上がってさっさと出口に向かう。

荒瀬も慌てて立ち上がる。

女将「ありがとう」

荒瀬「ごちそうさん。またくるわ」

荒瀬、ありさを追って出ていく。

48 同・前（道（夜））

ありさがスタスタと歩いていく。

ドアが開いて荒瀬が出てくる。

荒瀬、ありさの後を追う。

荒瀬「おい、待たんかい！」

荒瀬、ありさに追いつく。

ありさ、荒瀬の方を見ずに、

ありさ「今日はおっちゃんの家に泊まんで！」

荒瀬「なんやて……」

ありさ「別にええやろ？ それとも」

ありさ、足を止めて振り返り、荒瀬の方を見る。

荒瀬も足を止める。

ありさ「女でも来るんか？」

荒瀬「アホ！ そんなもん来るかいな」

ありさ「そりやそうやろな」

ありさ、前を向いて歩き出す。

荒瀬「そこで納得すなや」

荒瀬、ありさを追う。

#### 49道（夜）

ありさと荒瀬が並んで歩いている。

荒瀬「お前、お母ちゃんにちやんと言うてんのやろな」

ありさ「うん。ちゃんとメモ残してきた」

荒瀬「ほなええけど……」

荒瀬、ありさの方を見る。

荒瀬「なんかあつたんか？」

ありさ、荒瀬の方を見る。

ありさ「別に……ただお母ちゃんが再婚するって言い出しただけや」

荒瀬、足を止める。

ありさ、荒瀬の二、三步前まで歩いて振り返る。

ありさ「おっちゃんがあかんねんで。もたもたしてっしお母ちゃんとられてもうたやんか！」

荒瀬、ありさに近づく。

荒瀬「しゃあないやろ！」

荒瀬、ありさの横を通り過ぎて歩いていく。それを追うありさ。

ありさと荒瀬が並んで歩いていく。

#### 50××アパート・荒瀬の部屋・内（夜）

八畳ぐらいの和室と三畳ぐらいの台所。

部屋には競馬新聞や週刊誌、脱ぎ捨て

られた服。テーブルの上には半分インス

タントラーメンの入ったどんぶりと箸、

灰皿とタバコ、ライター。

ありさと荒瀬が靴を抜いて上がる。

ありさ「相変わらずきたないな」

荒瀬「うるさいわ」

ありさ、テーブルの上のどんぶりと箸を流しの方に運ぶ。流しには鍋や湯飲み、お皿が山積み。

ありさ、ペットボトルを手に、冷蔵庫を開ける。

ありさ「ほとんどビールしか入ってへんやんか」

荒瀬「ほっとけ」

ありさ「このハム、賞味期限切れてるやん！」

ありさ、冷蔵庫から食品を取り出す。

ありさ「これも、これもこれもや！」

ありさ、ゴミ箱に食品を捨てる。その後水道をひねり、洗いものをし始める。

荒瀬「ええで。そんなもんほっとき！」

ありさ、無言で洗いものをしている。

荒瀬、女性の上半身裸の表紙の週刊誌が部屋の隅にあるのをみつけ、そっと座布団のしたに隠そうとする。

ありさ「おっちゃん女おらんと淋しくないか？」

荒瀬、驚いた顔でありさの方を見る。

ありさ、洗いものをしている。

荒瀬、ホツとした顔。

荒瀬「なんや急に……」

ありさ「男の一人暮らしなんて淋しいやん。

しかもこんな家に近いとこでわざわざ……」

荒瀬「一人の方が気楽なんや」

ありさ、振り向いて明るい表情で

ありさ「なあ、お母ちゃんにアタックし！」

荒瀬「えっ……」

ありさ「そうや。うちがスーツこうたる！ 明日

一緒に買いにいこ！」

荒瀬「アホ言うな。お金貯めると違たんか？」

ありさ「もうええんや。うちはお母ちゃんの為にお金貯めてきたんや。せやのに……」

ありさ、振り向いて再び洗いものをし始める。

荒瀬、立ち上がり、ゆつくりとありさの方に近づく。ありさを横に退けて洗いものをし始める。

ありさ、荒瀬の横顔を見ている。

荒瀬「無理してスーツ着たかて似あわへん。  
自分らしく……自然体でいるのが一番や。  
自然体ってわかるか？」

ありさ「初めて聞いた言葉やけどなんとなく  
言いたいことはわかる」

荒瀬、ありさの方を見る。

荒瀬「お前もそうやで。小学生なら小学生ら  
しくしてるのが一番ええんや。無理して大  
人のまねしててもおかしいだけやで。子供  
が大人の服着てたらおかしいやろ？」

ありさ「……」

荒瀬「あつちでテレビでも見とり」

ありさ、ゆつくりとテーブルの方に向  
かい、座布団の上に座る。

ありさ、不思議そうな顔。座布団の下  
から雑誌を取り出す。

ありさ「おっちゃん！」

荒瀬、振り向く。

荒瀬「あつ……」

荒瀬、慌ててありさの方に近づく。

ありさ、立ち上がり、雑誌を取られま  
いと逃げ回る。

荒瀬「返せ！　こら……」

ありさ、逃げながらちらちらと本の中  
を見る。女性の裸の写真が見える。

荒瀬「アホ！　はよ返さんかい！」

ありさ「やーらし！　おっちゃんこんなもん  
ばっか見てんのかいな」

荒瀬、ありさから雑誌を取りあげる。

荒瀬「子供の見るもんちゃうわ！」

荒瀬、雑誌を手に流しの方に歩いてい  
く。

ありさ「それがおっちゃんの言う自然体の姿  
か？」

荒瀬、ありさに背を向けながら、

荒瀬「ちやう！　人間の自然体の姿や！」

荒瀬、雑誌を床に置き、洗いものを再  
び始める。

× × ×

ありさが布団に寝ている。

荒瀬が布団の側でありさの方を見ている。

荒瀬、微笑んで軽くため息をつく。

荒瀬「寝てる時だけは大人しいなあ……」

荒瀬、微笑む。そつと立ち上がり、玄関の方へいく。サンダルを履き、玄関から外へ出ていく。

51 同・前（夜）

荒瀬が部屋から出てくる。ポケットから携帯電話を取り出し、ボタンを押す。

52 鈴木家・居間（夜）

里美がパソコンに向かっている。

テーブルの上の携帯電話が鳴り、里美、手に取る。

里美「もしもし……」

53 ××アパート・荒瀬の部屋・前（夜）

荒瀬が携帯電話を手に立っている。

荒瀬「ありさ、今寝たわ！」

里美の声「そう……電話しよかと思ったけど、かけん方がええかと思って……荒瀬君やつたら安心やし。ごめんな、迷惑かけて……」

荒瀬「いや……それより結婚するんやて？」

里美の声「まだ分からへんけど……」

54 鈴木家・居間（夜）

里美がパソコンの前で少し俯き加減で携帯を手に電話をしている。

荒瀬の声「ありさのことか？」

里美「うん……」

荒瀬の声「あいつは大丈夫や。おまえとマサの子やないか……ありさは頭のええ子やで。ちゃんとわかってくれる……」

里美、軽く微笑む。

里美「なんか、親の私より荒瀬君の方があなさのことよう分かってるみたい。荒瀬君といる時は子供の顔してるもん……普段つっぱってる分、そのうつぶんを全部荒瀬君に



ぶつけてんのやろな……まあ、荒瀬君が父親みたいなものやったもんな。小さい頃からよなついてたし……」

荒瀬の声「しやあないやろ。お前は仕事は忙しくてなかなかかまってやれへんかったかな……それはあいつもよう分かつてる。でも一生懸命働いてきたから……そんな母親の姿をずっと見てきたからあいつはあんなしっかりしたええ子に育ったんやで。マサが死んでから今まで、お前は頑張ってたやうやってきたって」

里美、少し涙目になる。

荒瀬の声「再婚して幸せになったって、誰も文句言わへん」

里美、軽く鼻をすする。

荒瀬の声「明日、ありさに相手の男会わすんやろ？俺の方からちゃんと行くように言うさかい……」

里美「ありがとう……」

55××アパート・荒瀬の部屋・前（夜）

荒瀬が立って携帯電話をポケットにしまう。大きくため息をつき、空を見上げる。空には月も星も見えない。

荒瀬「明日、雨って言うとしたな」

荒瀬、ドアを開けて中に入っていく。

56 同・同・内（朝）

荒瀬が布団に寝ている。

ありさがハムエッグのつたお皿を二つ部屋のすみのテーブルの上に置く。

ありさ、荒瀬の方に近づき、

ありさ「おっちゃん、はよ起きや！」

荒瀬「うーん」

荒瀬、眠そうに寝返りをうつ。

ありさ、荒瀬の身体を揺さぶり、

ありさ「おっちゃん！」

荒瀬「どうせ雨やろ？休みの日ぐらいゆっくり寝かせろや！」

ありさ「アホ！雨なんか降っとらへんわ！」

荒瀬、目をしっかりと開け、  
荒瀬「なんやて！」

ありさ「雨が降るんは昼頃からや！ まだ降  
ってへんで！」

荒瀬、飛び起きる。

荒瀬「お前が今日は雨やって言うから……」

ありさ「誰も朝から雨降るなんて言うてへん  
わ！ はよ顔洗ってきいな」

荒瀬、大きくあくびをする。

荒瀬「まったく！ 寝てる時はかわいいのに  
なあ……」

荒瀬、立ち上がって洗面所に向かう。

× × ×

布団は片づけられ、テーブルを挟んで  
ありさと荒瀬が食事をしている。

荒瀬「御飯食べたらちゃんと家に帰るんやぞ」

荒瀬、トーストを口に持っていく。

ありさ、トーストを皿の上に置き、

ありさ「いやや！」

荒瀬もトーストを皿の上に置く。

荒瀬「お前何子供みたいなこと……」

荒瀬、吹きだす。

荒瀬「お前、子供やったな」

ありさ、むくれ顔。

荒瀬「いややったらいやってはつきり言うた  
らええやないか。自分の気持ちを正直に言  
うて、とことん話し合ったらええんや」

荒瀬、立ち上がってありさの方に行き、  
そばに座る。

荒瀬「お前なあ、もっと母親に甘えたらええ  
やろ。俺につっかかってくる時みたいに、  
言いたいことはつきり言うたらええんや！  
お母ちゃんかて、それ待ってんねんで。何  
でそんなにつっぱるんや」

ありさ「……」

荒瀬「もっと子供らしくした方がええで」

荒瀬、微笑みながらありさの肩に手を  
置く。

ありさ「……」

荒瀬「まあ、一回ちゃんと相手の男とおうて

話してみ。結論出すのはそれからでええやろ。大事なんはちゃんと正面からぶつかることや。逃げてたらあかん」

ありさ、荒瀬の手を振り切る。

ありさ「正面からぶつかってへんのはおつちやんやないか！ 何でお母ちゃんに自分の気持ち言わへんのや！」

ありさ、立ち上がる。

荒瀬「ありさ！」

荒瀬がおりさの手を取る。ありさあれ背の手を振りほどいて荒瀬に背を向ける。ありさ玄関に歩いて行く。振り返って、

ありさ「うちはおつちちゃんにお父ちゃんになって欲しいんや！」

ありさ、靴を履く。振り返り、荒瀬の方を見て、

ありさ「おつちちゃんのドアホ！ 意気地なし！」

ありさ、ドアを開けて外に出ていく。

57 道（朝）

ありさが足早に歩いている。

空から大粒の雨が降り始める。

ありさ、かけていく。

58 鈴木家・玄関く廊下（朝）

里美が廊下の掃除機をかけている。

玄関ドアの開く音。

里美、掃除機のスイッチを切る。

ありさが入ってくる。

里美、優しく微笑み、

里美「おかえり！」

里美、ありさを見て、

里美「濡れてるやん」

里美、部屋を出ていく。

ありさ、少し俯き加減で立っている。

里美がお風呂場の方に行き、タオルを手に戻って来る。ありさの側に行き、ありさの頭を拭き始める。

ありさ「大丈夫や。そんな濡れてへん」  
ありさ、タオルを里美に渡し、部屋を出ていく。それを見送る里美。

59××アパート・荒瀬の部屋・内

雨の音。

荒瀬が携帯電話を手に出している。

荒瀬「そうか……無事に帰ったんやったらええんや」

荒瀬、携帯電話を耳から離して二つ折りにするとポケットに入れる。

荒瀬、立ち上がり、窓に近づいて外を見る。

雨が激しく降っている。

荒瀬「今日は仕事なしやな」

荒瀬、外をじっと見ている。

〇〇鈴木家・ありさの部屋

ありさがうつむき加減で椅子に座っている。

里美の声「ありさ、入るよ」

ドアが開いて里美が入ってくる。

ありさ、里美に背を向けている。

里美がありさの方に近づく。

ありさ「いやや！」

ありさ、振り向いて里美の方を見る。

ありさ「うち、お母ちゃんが再婚するのいや！」

里美「……」

ありさ「結婚したいんやったら荒瀬のおっちゃん

はあかんのか？ おっちゃんやったら、

お父ちゃんになってもかまへん」

里美「ありさ……」

ありさ「おっちゃん、金は持ってへんけど、

その分うちがかせぐ……せやし……」

里美、しゃがんでありさのひざに両手を置く。

里美、ありさの顔を見る。

里美「それはできひん」

ありさ「……」

里美「荒瀬君はお母ちゃんにとってはいいい友達や。でも、それ以上にはなられへん」

ありさ、うつむいている。里美の手にありさの涙が二、三つぶ落ちる。

里美「ごめんな……荒瀬君とは結婚できひんけど、ありさがどうしても嫌なら結婚は辞めてもいいよ」

ありさ、うつむいたままにいる。

里美、立ち上がる。そつとありさの頭に手を置く。

里美、ドアの方に向かう。

里美、ノブに手をかけようとして振り返る。

里美「でも、お母ちゃんちよつと嬉しい！ ありさがそうやって気持ちぶつけてくれるの初めてやもんな」

里美、出ていく。

ありさ、ゆっくりと顔を上げる。

## 61 ありさの回想・公園

ありさと荒瀬がベンチに並んで座っている。

ありさ「やつとお母ちゃんがおつちちゃんに馬券買ってもらってもええて言ってくれた」

荒瀬「そうか」

荒瀬、タバコを携帯の灰皿に入れる。

荒瀬「お前を信用しとるからや」

ありさ「えっ？」

ありさ、荒瀬の方を見る。

荒瀬「お前がアホなことせえへんてそう信じとるからや。お前、ちゃんと競馬したい理由も言うたし、かけるレースとか、お金とか、これだけしかせえへんって自分から約束したんやろ？ それもきれいごとやのうて、予想したりして楽しみたいし、お金かけた方がテンション上がるって、そんなことも正直に言うた」

ありさ「お金稼いでちよつとでもお母ちゃん  
の役に立ちたいいうんも嘘ちやうよ」

荒瀬「わかつとるわかつとる。お母ちゃんか

てちゃんとそれぐらいわかつとる。けどそのことはさらつと言うただけやったやろ？せやしかえってよかったんや。それを強調しとつたら逆にお母ちゃん許してくれへんかったと思うで。お母ちゃんのプライド傷つけることにもなるしな」

荒瀬、真面目な顔でありさを見る。

荒瀬「ありさ、お母ちゃんはおまえのこと信用しとるし頼りにもしとる。絶対お母ちゃん裏切るようなことしたらあかんで」

ありさ、つばを飲み込んで、ゆっくりうなずく。

荒瀬「まあ、競馬すること許したんはこんまけしたっちゆうのもあるやろけどな」

荒瀬、いたずらっぽく笑う。

回想終わり

### 62 鈴木家・ありさの部屋

ありさがいすから立ち上がり、慌てて部屋から出ていく。

### 63 同・居間

里美がテーブルの上の携帯電話を手取る。「木村浩介」のところにカーソルを合わせず。

足音。

ドアの開く音。

ありさの声「お母ちゃん！」

里美が振り向くとありさがドアの所に立っている。

ありさ「会うぐらいなら会ってもええよ！」

里美「ありさ……」

里美、テーブルの上に電話を置く。

里美「でも……」

里美、ありさの方に近づき、しゃがんでありさの肩に両手をかける。

里美「無理せんでもええんよ」

ありさ、頭を振る。

里美「……」

ありさ、里美に背を向けて歩いていく。

ありさ「何着てこかなあ……」  
ありさの後姿を見ている里美。

64 同・廊下

ありさ、暗い表情で歩いてくる。

65 同・居間

壁の時計が三時三十五分を指している。  
よそ行きの服を着たありさがテレビを  
見ている。

テレビで競馬中継が放送されている。  
里美が入ってくる。

里美「ありさ、そろそろ……」

ありさ「もうちよつと待って！」

テレビ「一着はメジロサンダー、二着テイエ

ムサイレンス……」

ありさ「やった！」

と叫ぶが、顔に笑みはない。

里美「当たったん？」

ありさ「うん。まあな」

里美が心配そうな表情でありさを見て  
いる。

ありさ、立ち上がり、笑みをうかべ、

里美の方を見る。

ありさ「さ、行こか」

ありさ、玄関の方に向かう。それを追

う里美。

66 阿倍野・路面電車・内（夕）

ありさと里美が並んで座っている

里美「（携帯電話を手に）かつこええ人なん

よ。写真見てみる？」

ありさ「ええよ。どうせ会おうたらわかんねやし」

里美、携帯電話をカバンにしまう。

67 ありさの回想・鈴木家・居間（夜）

ありさと荒瀬がご飯を食べている。

ありさ「お母ちゃん、顔でお父ちゃんのこと  
選んだんやろか」

荒瀬「なんか他<sup>ひと</sup>人事<sup>じんじ</sup>のように話すんやな。  
お前のお父ちゃんのことやぞ」

ありさ「せやかてうちお父ちゃんのことほとんど覚えないうんやし……」

荒瀬「マサは顔だけちごて中身もええやつや  
ったで。確かにお母ちゃんは面食いかもし  
れへんけど、ちゃんと性格とかも見て選ん  
だんや」

ありさ「それはわかるけど、なんかお母ちゃ  
ん見とると頼りないし危なっかしいんやも  
ん」

荒瀬「（大声で笑い）お母ちゃんもお前に言  
われたないやろな」

回想終わり

68 天王寺駅・外観（夕）

雨が降っている。

69 同・連絡通路（夕）

ありさと里美が歩いている。  
看板に「××百貨店↑」と書いてある。  
ありさ、里美、矢印の示す方に歩いて  
いく。

70 ××百貨店・入り口（夕）

木村が立っている。

ありさと里美が歩いてくる。木村の側  
まできて足を止める。

木村、ありさの方を見て微笑む。

木村「こんにちは」

ありさ、顔を上げて木村の方を見る。

71 ありさの回想 鈴木家・ありさの部屋

机に写真たてが置いてある。写真に笑  
顔の政和が写っている。

回想終わり

72 ××百貨店・入り口（夕）

ありさ、里美、木村が立っている。

ありさ、木村の顔をじっと見ている。



ありさの声「お父ちゃん……」

ありさ、微笑む。

ありさ「（木村に）こんにちは」

里美、微笑む。

ありさ、里美、木村、中に入っていく。

73 ゲームセンター（夕）

ありさと木村が音楽に合わせて太鼓を叩いている。

里美が隣でそれを見ている。

× × ×

ありさと木村がUFOキャッチャーでトラッキーのぬいぐるみをとろうとしている。

里美が隣でそれを見ている。

トラッキーのぬいぐるみをキャッチし、喜ぶありさと木村。

74 × × 百貨店・レストラン・外観（夕）

小さなイタリアの国旗が掲げられている。

75 同・内（夕）

若い客の多い庶民的な感じのレストラン。

窓から雨が降っているのが見えている。

ありさ、ありさの横に里美、里美の前に木村が座っている。

足元にデーパートの紙袋。

里美「よかったね、ありさ」

里美、デーパートの紙袋をちらっと見る。

そのまま視線を木村に移す。

里美「ありがとう」

木村「いや……」

里美「でも、もっと女の子らしい服選んだら

ええのに……」

ありさ「ええんや。うちの趣味ちゃう」

里美、ありさ、微笑む。

若い女性の従業員がテーブルに近づき、ありさの前にオレンジジュースの入っ

たグラスを、里美と木村の前にワイングラスを置き、赤ワインのボトルをテーブルの上に置いて去る。

里美がワインを木村のグラスに注ぐ。木村がボトルを里美から取り、ワインを里美のグラスに注ぐ。それをじつと見つめるありさ。

79 ありさの回想・焼き鳥屋・内（夜）

ありさと荒瀬が向かい合って座っている。

荒瀬が冷酒を冷酒グラスに注いでいる。

回想終わり

710 × × 百貨店・レストラン・内（夕）

ありさ、里美、木村が座っている。

里美と木村がワイングラスを持つ。

ありさ、心持ちうつむいている。

里美がありさの方を見る。

里美 「かんぱいしよか」

ありさ、ゆつくりとジュースの入ったグラスを持つ。が、顔は上げていない。

里美 「かんぱい」

木村 「かんぱい」

木村、ありさのグラスに自分のグラスをふれさせる。

ありさ、グラスをコースターの上に置く。

× × ×

ありさ、里美、木村が座っている。

三人の前にスープの皿が置いてある。

木村が上品にスープを飲んでいる。

ありさ、スープをゆつくりとすくって口に運ぶ。

78 ありさの回想・焼き鳥屋・内（夜）

ありさと荒瀬が向かい合って座っている。

荒瀬、焼き鳥を食べる。口の周りに少したれがつく。それを手でぬぐう荒瀬。

ㄥ××百貨店・レストラン・内（夕）

ありさ、里美、木村が座っている。

ありさがスープをじっと見つめている。

スープに荒瀬の顔が映っている。

ありさの声「おっちゃん……」

ありさがスープを大きな音をたてて飲み始める。

ありさの横でスープを飲んでいる里美が、スープを飲むのを止めてありさの方を怪訝な顔で見る。

里美「ありさ……？」

× × ×

ありさ、里美、木村が座っている。

それぞれ三人の前にパスタののった皿。

ありさが大口を開けてパスタを口に運

び、音をたてて食べている。

木村「ありさちゃんはいつも何して遊んでるの？」

ありさ、フオークでパスタをひっかけながら、

ありさ「ゲーム」

木村「やっぱり最近の子やな」

里美「忙しくて私がかまってやれへんから……」

ありさ「マージャンのゲームや」

木村、里美、驚いた顔。

里美「ありさ……」

木村「本とかは読まへんの？」

ありさ「読まへん。新聞なら読むで」

木村「そう。偉いなあ……」

ありさ「競馬新聞やけどな」

里美「一体どうしたん……」

ありさ「別に。ほんまのことやん」

ありさ、音をたててパスタを食べる。

木村「あつ、将来の夢は？ 何になりたいん？」

ありさ、顔をあげる。口元トマトソース

がついている。

ありさ「金貸しや」

里美、木村、無言でありさの方を見る。  
ありさ、微笑む。

里美、強い口調で、

里美「いいかげんにしなさい！」

ありさ、里美の方を見て唇を噛みしめる。

ありさ「うち、イタリア料理なんか嫌いや！

焼き鳥の方が好きや！」

ありさ、席を立って入り口の方に駆け出す。

里美「ありさ……」

ありさが店を出ていく。

木村「追いかけてへんでええの？」

里美「ごめん」

里美、席を立つ。

里美、椅子の上のカバンを手に取り、  
入口の方へ向かう。

80 同・内（夜）

ありさが下りのエスカレーターに立っている。

ありさ、斜め後ろを振り向く。少し上  
段に里美が立っている。

81 阪堺電車天王寺駅・ホーム（夜）

ありさが電車を待っている。

少し離れたところで里美が立っている。

82 路面電車・内（夜）

ありさ、一番前の席に座っている。

その少し後ろに里美が立っている。

アナウンス「次は、松虫」

ありさ、ボタンを押す。

83 阿倍野・道（夜）

雨がきつく降っている。

路面電車が走っていく。

84 松虫駅（夜）

ありさ、里美が路面電車から降りる。

里美「（傘を差し出し）はい」  
ありさ「いらん」

ありさ、駆け出していく。

85××アパート・荒瀬の部屋・前（夜）

階段を上る音。ずぶぬれのありさが現れ、ブザーを押す。

荒瀬の声「はい」

ドアが開く。

荒瀬「ありさ：：ずぶぬれやないか！ とにかく中入れ」

ありさが中に入っていく。

荒瀬「今お母ちゃんが心配して電話かけてきたで」

荒瀬、ドアを閉める。

86 同・内（夜）

ありさがテーブルの側で立っている。荒瀬がタンスを開けて中を見ている。

荒瀬「風邪ひくしこれではよ身体拭け！」

荒瀬、バスマットをありさに投げる。ありさ、頭を拭く。

ありさ「おっちゃん：：」

荒瀬「なんや？」

ありさ「これ、足ふきやん！ しかもホテルパークスって書いてあんで。さては盗んできたな」

荒瀬「あつ：：東京へ行ってビジネスホテル泊まった時に間違っって持ってきてもうたんや。ちゃんと洗ってあるし同じようなもんやろ」

ありさ「おっちゃん！」

ありさ、バスマットをまるめて荒瀬に投げる。マットが荒瀬の顔に当たる。

荒瀬「いったいなあ。何すんねん」

× × ×

ありさと荒瀬がテーブルに向かい合っ  
て座っている。

ありさが大きなシャツを着ている。  
カーテンレールに子供用の服のかかつ

たハンガーがひっかけられている。  
荒瀬、ありさを見て笑う。

荒瀬「よう似合うで」

ありさ、お茶を飲む。

荒瀬、真顔になる。

ありさ「おっちゃん。うち、ここで暮らす！  
ええやろ？」

荒瀬「お母ちゃんの彼氏、そんなに嫌な奴や  
ったんか？」

ありさ、頭を振る。

ありさ「お父ちゃんに似たええ男やった」

荒瀬「ほななんでや。祝福したたらええや  
んか」

ありさ、荒瀬の方を見て睨みつける。

荒瀬「お前かてお母ちゃんには幸せになつて  
ほしいやろ？」

ありさ「顔はよかったけど、中身はまだよう  
わからん……」

荒瀬「お母ちゃんが選んだ男や。そんな悪い  
やつとちゃうやろ。お前は頭のええ子や。

それぐらいは分かつとるわな」

ありさ「……」

荒瀬「本当は祝福したいんやろ？」

ありさ「おっちゃん、うちは……」

荒瀬「なあ、ありさ。今日のようなやり方は  
卑怯とちゃうか？」

ありさ、大きな音をたててお茶をすす  
る。

荒瀬、ため息をつく。

荒瀬「お前、勘違いしとるで！」

ありさ、湯のみを手に、上目遣いに、  
睨むように荒瀬の方を見る。

荒瀬「俺は別に意気地がなくてお前のお母ち  
ゃんに気持ちを伝えへんのとちゃうで！」

ありさ「……」

荒瀬「お前のお母ちゃんは俺にとっては憧れ  
や！ 遠くから見てるのがええんや。言っ  
てること分かるか？」

ありさ、ゆつくりと頷く。

ありさ「分かるけど分からん！」

荒瀬、ありさの方に近づき、優しい表情で微笑む。

荒瀬「なあ……お前に新しいお父ちゃんができて、俺とお前の仲は変わらへん！　そうやる？　今までどおり、ええ友達や」

ありさ、少し涙目になりながらうなづく。

荒瀬「なに泣いとるんや！」

ありさの目から涙が流れ始める。

荒瀬「また、弁当作って持ってきてくれるか？」

ありさ、顔をひきつけながらうなづく。

荒瀬「泊まりにきて朝ご飯作ってくれるか？」

ありさ、大きくうなづく。頬を涙が流れている。

ありさ「おっちゃん！」

ありさ、荒瀬の胸に飛び込む。

#### 87 阿倍野・道（夜）

雨の中、里美が歩いている。

#### 88 × × パート・荒瀬の部屋・内（夕）

ありさが荒瀬の胸に顔をうずめている。

荒瀬がそつとありさを離す。

荒瀬「さ、はよ帰らんとお母ちゃんが心配してんで」

ありさ、ゆっくりとうなづく。

荒瀬の服の胸のあたりが濡れている。

荒瀬、微笑みながら、

荒瀬「お前、鼻水つけたな」

ありさ「そんなもんつけてへんわ！」

荒瀬、ポケットからくしゃくしゃのハンカチを取り出してありさに渡す。

ありさ、それを受け取る。

ありさ「このハンカチ、きれいなんやろな」

荒瀬「ごちゃごちゃ言うたらんとはよ拭け！」

ありさ、ハンカチで顔を拭いて荒瀬にそれを渡す。

荒瀬「さ、帰るか。しゃあないし家まで送ってつたるわ」

荒瀬、カーテンレールにかかっている

ハンガーを手に取る。

89 同・前（夜）

子供服を着たありさと荒瀬が階段を下りてくる。

荒瀬、傘を開いてありさの肩を抱く。

里美が歩いてくる。

里美「ありさ……」

荒瀬「おい！」

荒瀬、ありさの背中を軽く叩く。

ありさ「ごめん、お母ちゃん……」

ありさ、里美の方に駆け寄る。

里美、ありさの肩を抱く。荒瀬の方を見て、

里美「ありがとう」

荒瀬、はにかみながら微笑む。

ありさ「おっちゃん」

荒瀬、ありさの方を見る。

ありさ「今日のレース、三万ぐらい勝ったはずやで」

荒瀬「えっ……いや、実は今日気付いたら三時半過ぎて……携帯から頼むの……」

ありさ「なんやて！」

ありさ、微笑んで。

ありさ「しゃあないな。今日のはなかったことにしといたるわ。おやすみ」

ありさと里美が歩いていく。それを見送る荒瀬。

90 通天閣・外観

ありさのN「大阪で有名な通天閣は難波駅と天王寺駅のちょうど真ん中ぐらいの所にある。大阪のシンボルみたいに言われとるけど、東京タワーやパリのエッフェル塔は遠くからでも見えるらしいけど、通天閣は小さくて近くまで行かんと見ることができひん。そういえば東京では東京タワーよりもっと高いタワーができたらしい。うちはまだ見たことはない。けど高けりやええつてもんでもない思うけど……」



91 通天閣周辺・真上から

ヘリコプターの音。

通天閣周辺を真上から映す。

ありさのN「おもしろいんが、通天閣を半分囲むように、半円を描いたような道があって、そこから三本広い道っていうても大して広ないけど道が延びとる。地図で見ると、半分海から昇った朝日が光を放つとるように見える」

92 パリ・エッフェル塔・真上から

ありさのN「パリの街がちよつと似とって、凱旋門を囲むように円を描いたような道があつて、その辺りの道はみんな凱旋門に向かつてるらしい。こういうのを放射状って言うそうや。通天閣の周りの道はその上半分の小さいやつて感じ。中途半端やなあ。けどそういう中途半端なとこ、けっこう好きや」

93 写真・昔の通天閣

ありさのN「そう言えばお母ちゃんが教えてくれたけど、通天閣の周りの道はパリをまねて作ったらしい。通天閣も、もともとの通天閣は下が凱旋門、上がエッフェル塔のようになつとつたそうや。ネットで昔の通天閣の写真みてちよつと笑わろてもうた。なんやパリの街が大阪に似とると思たら大阪がパリをまねしとつたんや。けどパリと大阪って全然雰囲気違うっていうか全く逆のよ  
うな気がするんやけど……」

94 ××建設事務所・前（夕）

駐車場の奥に建物がある。

ガラス越しに作業服を着た迫田や男性数人と、事務服を着た女性が二人座っているのが見える。  
里美が歩いてきて中に入っていく。

里美が入ってくる。

里美「こんにちは」

迫田が慌てて立ち上がり、里美に近づく。

迫田「さ、さとみちゃん、久しぶりやな。ますますきれいになって」

里美「（頭を下げ）ごぶさたしてます。いつもありさがすみません。仕事の邪魔してるんところがいますか？」

迫田「気にせんでええよ。こっちこそ差し入れ持ってきてもらったりして……しっかりしたええ子やね」

里美、苦笑して軽くうつむく。

里美「（紙袋を差し出し）これ、よかったらみなさんで……」

迫田「（袋を受け取り）ありがとう。荒瀬やったらもうすぐ帰ってくると思うわ。（ソファ―を指差し）よかったらそこで……」

里美「ありがとう」

96 阿倍野・道（夕）

荒瀬と里美が歩いている。

里美「ごめんね、職場まで訪ねてきて」

荒瀬「いや。みんな里美の顔見られて喜んでたで。特に迫田の奴なんか……嫁さんにちくつたらろかな……」

里美「（苦笑して）荒瀬君の家に行ってもよかつたんやけど、私もみんなに会いたかつたし、ありさのことでお礼も言いたかつたしね。荒瀬君にもお礼言わんとね。ほんま、ありがとう」

里美、荒瀬の方を見て軽く頭を下げる。

荒瀬「いや。あれからどうなった？」

里美「週末に改めて三人で食事に行くことになった」

荒瀬「そうか、よかったな」

里美「うん」

荒瀬「結婚したらどこに住むんや？ 阿倍野のあの家か？」

里美「うん。そのつもり。いずれは京都に引越そうと思ってるんやけど、転校させるのはかわいそうやし……中学からかな。相手の人は今はこっちで一人暮らししとるけど、もともと京都の人で、両親は京都に住んどの。離婚暦のある人なんやけど、結婚生活しとったときに母屋の奥に家を建ててて、そこに住も思ってる」

荒瀬「そうか……（苦笑して）あのありさが京都になじめるかどうかちよつと心配やけど、まあまだ二年先の話やし、転校せんでええんやつたらありさも納得して行くやろ」  
里美「うん。とりあえずその前に向こうの親にありさを紹介しよ思て。ゴールデンウィークに連れて行こ思ってる」

荒瀬「そうか」

97 鈴木家・台所（朝）

ありさがおにぎりを作っている。

× × ×

ありさがおにぎりの入ったお弁当箱に炒めたウインナーを入れる。

98 同・居間（朝）

里美が立っている。

ピンクのワンピースを着たありさが入ってくる。

里美「そのワンピース……九州のおじいちゃんとおばあちゃんに買<sub>い</sub>うてもろたやつ？」

ありさ「うん」

里美「嫌い<sub>い</sub>違ったん？」

ありさ「うちの趣味ちやうけど、今日はこれを着て行きたい気分なんや。動物園には合<sub>わ</sub>へんのは分かってんのやけどな」

里美「（微笑<sub>お</sub>んで）よう似合<sub>お</sub>とるよ」

ありさ「さ、行こ」

99 天王寺動物園・玄関

木村が立っている。

ありさと里美が木村の方に歩いて行く。

ありさ「この間はすみませんでした」  
ありさ、頭を下げる。

100 天王寺動物園・内

ありさと里美、木村がコアラを見ている。  
× × ×  
ありさと里美、木村がホッキョクグマを見ている。

101 天王寺公園・内

ありさ、里美、木村がベンチに座ってお弁当を食べている。

102 大阪・心斎橋筋・雑貨屋

ありさがキャラクターグッズを見ている。  
その横で里美と木村が立っている。

103 同・同・かばん屋

里美が肩にカバンを引っかけて鏡で自分の姿を見ている。  
その横でありさと木村が立っている。

104 同・道頓堀

グリコの看板  
ありさと里美・木村が歩いていく。

105 同・××ビル・服屋（夕）

ありさ、里美・木村がそれぞれ服を見ている。

106 同・同・前（夕）

ありさ、里美、木村が立っている。  
木村「夕飯、何がええ？」  
ありさ、ちらっと自分のワンピースを見る。

木村「何か食べたいもんある？」  
ありさ、軽く首を横に振り、微笑んで、  
ありさ「お好み焼き」

107 おこのみ焼き屋・内（夜）

こぎれいなお好み焼き屋。

ありさ、里美、木村がテーブルを囲んでメニューを見ている。

その横に従業員が立っている。

里美「他に何か注文する？」

108 ありさの回想・お好み焼き屋・内（夜）

古めかしい感じのお好み焼き屋。

ありさと荒瀬がメニューを見ている。

ありさ「お好み焼きや焼きそばだけちゃうんや」

荒瀬「こういう店を鉄板焼き屋言うんや」

従業員がジョッキとグラスを運んでくる。

従業員「生と烏龍茶になります」

従業員、ジョッキとグラスをテーブルの上に置く。

従業員「注文お決まりでしたらお伺いします」

荒瀬「とりあえず豚キムチと砂肝、あと牛す

じの煮込み」

従業員「はい」

従業員厨房の方へ向かう。

ありさ「牛すじってすじ肉のことやろ？ そ

んなんおいしいん？」

荒瀬「ちゃんと長いこと煮込んだら柔らかくなるんやで」

ありさ「ふーん……」

× × ×

テーブルの上に飲み物と豚キムチ

従業員「牛すじの煮込みになります」

従業員がテーブルの上に置く。

荒瀬「食べてみいや」

ありさ、おそるおそる牛すじを食べる。

ありさ「めっちゃおいしい！」

荒瀬「（微笑んで）せやろ？」

回想終わり

109 元のお好み焼き屋・内（夜）

ありさ、里美、木村がテーブルを囲んでいる。その横に従業員が立っている。

ありさ「牛すじの煮込み」

従業員、びっくりした顔。

里美「小学生が頼むもんちゃうんちゃう？ 普

通コーンバターとかウインターとか言いそうやけど……」

ありさ「せやかてそんなもんは家でもすぐ作れるやん。うちかて作れんで。せつかく外に食べに来てんのに外でしか食べられんよ。うなもんを注文せな損や。牛すじの煮込みなんてすぐ作れるもんちゃうし」

里美、木村が同時に吹き出す。ありさもつられて笑う。

里美「ありさには負けるわ」

## 110 難波CITY・通路（夜）

人ごみの中をありさ、里美、木村が歩いている。

なみ（十）、なみの父親、なみの母親が歩いて来る。

なみ、ありさを見ると微笑んで、ありさに向かつて手をふる。ありさ、恥ずかしそうに手を振り返す。

なみ「最初誰かと思ったよ。そのワンピースかわいいね。よお似合おとるよ」

ありさ「ほんま？」

なみ「ほんまほんま。ありさちゃんって何着ても似合うんやね。じゃあまた明日」

ありさ、なみ、手を振り合う。

その横で里美、なみの母がお互いお辞儀をする。

## 111 同・喫茶店・内（夜）

ありさ、里美、木村がテーブルを囲んでいる。ありさの前にはオレンジジュース、里美の前に紅茶、木村の前にコーヒー、ありさと里美に間にワッフル。

里美「ゴールデンウィークに京都に行こう思うんやけど……」

ありさ「木村さんのおうちに行くん？」

木村「そう。僕のお父さんとお母さんがありさちゃんに会いたがってるんや」

ありさ「ええよ」

里美、木村、ちよつとびっくりした顔。

木村「せっかく京都へ行くんやし、どこか行きたいところある？」

ありさ「もし二九日に行くんやったら……」

木村「二十九でもええよ。どこか行きたいところあるん？」

ありさ「ううん、なんでもない」

里美「ありさ……？」

ありさ、うつむいて食事をしている。

木村「……じゃあ、嵐山にでも行こうか。『時雨殿』行ったことある？」

ありさ「ううん。なに、そこ」

木村「百人一首は知つとるやろ？ 百人一首の世界を体感できるそこや。みんながゲーム機を手持って、そのゲーム機に映ったのと同じ札を床に映った札から探して競うんや」

ありさ「おもしろそう。行く」

### 112 同・化粧室（夜）

ありさが手を洗っている。

ありさ「京都か……競馬場連れてってなんて言えへんよな……」

ありさ、鏡を見てため息をつく。

ありさ「なんか自分とちやうみたい……やっぱり似合わんよなあ……ぜったいなみちゃんの方が似合う」

ありさ、ポケットからハンカチを出して手を拭く。

### 113 同・通路（夜）

里美、木村が立っている。

ありさ「おまたせ」

ありさが駆け寄り、木村から荷物を受け取る。

十人ぐらいの生徒が本を読んだりして  
いる。その中になみ。

ありさ、教室に入ってくる

ありさ「おはよう」

ありさ、席についてカバンを下ろす。

なみが本を置いてありさに近づく。

なみ「おはよう」

ありさ「おはよう」

なみ「昨日あれからどこ行ったん？」

ありさ「あれからはすぐ帰った」

なみ「一緒にいた人お母さん？」

ありさ「うん」

なみ「きれいな人やね。男の人は？」

ありさ「お母ちゃんの彼氏。多分お父さんに

なる人」

なみ「（少し不思議そうな顔をして） そうな

んや。あの大工さん彼氏ちこ違たんや」

ありさ「あの人は友達」

なみ「ふうん、でも、じゃあ大工さんにあん

まり会えへんくなるね」

ありさ「えっ？」

なみ「せやかてお父さんの代わりみたいな人  
やったんやろ？ 新しくお父さんができた  
ら…：あつごめん、でもうちのお母ちゃん  
にも仲のええ男の友達いるみたいやし…：」

ありさうつむいている。顔を上げ、

ありさ「（微笑んで） 気にせんといて。お母  
ちゃんは関係ない。お母ちゃんが違う人と  
結婚してもうちとおっちゃんは今まで通り  
やし」

なみが自分の席に戻る。

ありさ、席につくと、ため息をつく。

ありさと里美が座っている。



「京都」と書いた看板。

アナウンス「京都、京都」

ありさと里美が電車から降りる。

118 京都・嵐山・全景

渡月橋をたくさんの人が歩いている。

119 同・川沿いの道

ありさ、里美、木村が歩いている。

120 時雨殿・全景

121 同・受付

受付でありさ、里美、木村がゲーム機をもらう。

122 同・展示会場

床に大きな画面。京都の地図が映っている。

二十人ぐらいの人がゲーム機を手に立っている。その中にありさ、里美、木村の姿。

床の画面が百人一首の読み札の映像に切り替わる。

ありさのゲーム機の画面に百人一首の読み札。ありさ歩きだす。

ありさ「あつた！」

ありさ、足を速めてゲーム機と同じ映像の映った床のところまで足を止める。

ゲーム機の画面を筆でタッチする。

ゲーム機に二重丸が現れる。

ゲーム機の画面が違う読み札に変わる。

123 京都・嵐山・道

ありさ、里美、木村が歩いている。

木村「けどすごいなありさちゃん。大人もた  
くさんおつたのに二位なんてすごいやん」

里美「あんたがあんなに百人一首覚えとると  
は思わへんかったわ」

ありさ「覚えとんのは二、三枚だけや。でも

さっきのは同じ絵の札探したらえんやから別に覚えとらんでも取れるやん」

木村「そうか……そう言われたらそうやな」  
木村、微笑む。

124 路面電車・内  
満員。

ありさ、里美、木村が立っている。

125 京都・竜安寺・内

ありさ、里美、木村が石庭を見ている。

126 京都・北野白梅町・××スーパー・内

ありさ、里美、木村が服を見ている。

127 同・同・交差点

車が止まっている。

車からラフな格好の修二（六十）が降りる。

ありさ、里美、木村が歩いて来る。

修二「こんちには。ありさちゃんやんな」

ありさ「こんにちは」

ありさ、頭を下げる。

128 車・内

運転席に修二。その横に木村、後部座

席に里美とありさ。

車が坂道を走っていく。

× × ×

修二「お疲れさん。着いたで」

129 木村家・・外観（夕）

住宅地の中の一軒家。奥にも家がある。

130 同・前（夕）

車が駐車場に入る。駐車場は四台ぐらい車が止められるスペース。

ありさ、里美が車から降りる。

しばらくして木村も降りる。

ありさ「家が二つある」

木村「ああ、前のは僕のお父さんとお母さんが住んどる。奥の方のは僕の家や」

ありさ「えっ？ 大阪に住んどるんちゃうん？」

木村「今は大阪に住んどるけど、前結婚しotta時に奥さんと住んどったんや」

ありさ「ふうん……」

木村「とりあえず僕の家の方に荷物を置いてこうか」

木村が奥の家の方向に向かって歩き出す。

ありさ、里美も木村に続く。

131 木村家（浩介の家）・和室（夕）

ありさ、里美が荷物を置く。

ありさ「お母ちゃんはここへ来たことあるの？」

里美「木村さんのお父さんとお母さんには大阪で会ったことがあるけど、ここへ来るんは初めてや」

132 同（修二・美津子の家）・居間（夕）

テーブルの上にお寿司などのご馳走。

ありさ、里美、木村、木村美津子（五八）。木村修二が食事をしている。

美津子「ありさちゃんはいらないなあ。お母さんおそなったりして怖ないの？」

ありさ「大丈夫です。あんまりおそなる時は……」

133 ありさの回想・鈴木家・居間（夜）

缶ビール片手に荒瀬がテレビを見ている。テレビでは阪神タイガースの野球放送。

ありさがたこやき機でたこやきを焼いている。

ありさ「おっちゃん、テレビばかり見とらんとちよつとは手伝ってえや！」

荒瀬「ちよつと待て、今ええとこなんや」

ありさ「もう！」

回想終わり

134 木村家（修二・美津子の家）・居間（夕）

ありさ、里美、木村、美津子、修二が  
食事をしている。

美津子「おそなる時は？」

ありさ「先にご飯食べたりにしてます」

美津子「料理作ったりもするんやて？」

ありさ「はい。でも一人のときはガスは使わ  
ない約束です。レンジとか、IHの卓上コ  
ンロを使ったりしてます」

美津子「そう……」

修二「好き嫌いはあるん？」

ありさ「しいたけが嫌いです。好きなのは、  
唐揚げやポテトサラダも好きやし……やっ  
ぱりお好み焼きやたこ焼きかな」

× × ×

美津子がカステラを運んできてテーブ  
ルの上に置く。

美津子「どうぞ」

里美「すみません」

ありさ「ありがとう」

ありさ、カステラを食べる。

ありさ「おいしい」

美津子「そう？ よかった。それ、私が作っ

たんよ」

里美「ほんとに？」

ありさ「カステラ家で作れるんや」

美津子「ちよつとめんどくさいけどな。あり

さちゃんはお菓子作りとか興味あるの？」

ありさ「はい。料理は好きです」

美津子「そう。今度一緒にカステラでも作る

か」

ありさ「はい……」

ありさ、フォークをお皿の上に置く。

ありさ「あの……明日じゃダメですか？」

美津子「明日？ でも明日は三人で買い物も

して映画見ると違たん？」

ありさ「お母ちゃんらは二人で遊びにいった  
らええ。うちはおばあちゃんとカステラ作  
りたい」

里美「ありさ？」

里美、ありさの方を見る。

ありさは美津子の方を見ている。

美津子「わかった。じゃあ明日一緒にカステラ作るか」

ありさ「うん」

美津子「ありさちゃん抹茶は大丈夫？」

ありさ「はい、好きです」

美津子「じゃあ、抹茶カステラにしよか」

ありさ「はい」

135 同・木村家（浩介の家）・和室（夜）

布団が二つ敷かれ、ありさが横になっている。目は空いている。

襖が開く音。ありさ、布団を引っ張って自分の肩にかけ、目を閉じる。

パジャマ姿の里美が入ってくる。ありさの方を見て、

里美「ありさ、もう寝たん？」

ありさ「……」

136 京都山科・道（朝）

ありさ、里美、木村が歩いている。

小学校の前に差し掛かる。

木村「あれが僕の通ってた小学校や」

137 木村家（修二・美津子の家）・居間（朝）

ありさ、里美、木村、奈津子、修二が食事をしている。テーブルの上に和食の朝食。

138 同・玄関（朝）

ありさ、奈津子が立っている。

里美、木村が靴を履いている。

里美「じゃあ、お願いします」

奈津子「いってらっしゃい」

ありさ「いってらっしゃい」

139 同・台所・居間

ありさが粉をふるっている。その横に

美津子

美津子「抹茶の替わりにココア入れてもええよ」

ありさ「おいしそう……」

× × ×

ありさがハンドミキサーで卵を泡立てている。

× × ×

ありさが型に生地を流している。

× × ×

ありさがオーブンレンジにカステラの生地の入った型を入れ、スイッチを押す。

美津子がありさの横に立っている。

美津子「あとは焼きあがるのを待っただけや」

ありさ「はい」

× × ×

ありさ、奈津子、修二がカステラを食べている。

× × ×

居間でありさ、奈津子、修二がテレビで競馬を見ている。

美津子「ありさちゃん、競馬好きなんやて」

ありさ「うん」

修二「そろそろ天皇賞始まるなあ」

美津子「おじいちゃんも競馬好きなんよ」

奈津子がテーブルの上のお皿を片付け始める。ありさが湯呑みを片付け始める。

奈津子「ええよ、おじいちゃんと一緒にテレビ

見とり」

奈津子、ありさの持っている湯呑みをお盆に置いて流しの方へ持っていく。

修二「ありさちゃんは好きな馬おるんか？」

ありさ「今日出とる馬の中やったらブルーロ

ーズ。きれいな馬やし、名前も好きやし：

でも牝馬やし今日は難しいんちゃうかな」

修二「そうか……。でも、なんで競馬に興味

持つようになったんや？」

ありさ「知り合いの大工さんたちがやってた

から。でももうやめる」

修二「なんで？」

ありさ「……小学生が競馬見るなんてあんまり  
りようないみたいやし……」

修二、美津子、顔を見合わせる。

× × ×

テレビの画面で馬が走っている。

× × ×

アナウンサー「ブルーローズ、ブルーローズ  
が一着です……」

ありさ「やった！」

ありさと修二が両手を取り合い、上下  
に揺らす。

修二「よかったな、お気に入りの馬が勝って」

修二と美津子がありさの方を見て微笑  
む。

140 同・前

ありさと奈津子が立っている。

ガレージから車が出る。運転席に修二。

ありさ「（頭を下げ）おじやました」

奈津子「また遊びに来てね」

ありさ「はい」

ありさ、車に乗り込む。

141 京都駅・改札口（夕）

ありさ、里美、木村、修二が歩いてく  
る。

木村が荷物を里美に渡す。

里美「ありがとう」

木村「じゃあありさちゃん、また」

修二「気をつけてな」

ありさ「はい」

里美、ありさ、改札口を通る。

木村と修二が手を振る。ありさが振り  
返す。

142 木村家・居間（夕）

美津子がテレビを見ている。

木村の声「ただいま」

木村と修二が入ってくる。

美津子「無事帰ったん？」

木村「（その場に座り）うん」

修二「（座りながら）ええ子やな。あの子」

木村「うん」

修二「お前から聞いたときはちよつと不安や  
ったけどお母さん思いのやさしい子やな」

美津子「ほんと、見てていじらしいわ。今日、  
あんたらに気つこて私とカステラ作るって  
言い出したんちやうんかなあ」

木村「それだけと違うやろって里美は言うと  
った。ほんとにカステラ作りたかったんや  
と思うよ。料理好きみたいやし」

美津子「しっかりした子やな」

木村「そうやな：：けど、しっかりしすぎと  
るといふか、無理しとるといふか：：里美  
はお母さんとお父さんにあの子の子供の部  
分を引き出してほしいみたいなんや」

修二「うちらはただほんとの孫やと思つて接  
するだけや」

木村「それでええんや。そうしてくれるだけ  
でええ」

美津子「けど、里美さんの方のおじいちゃん  
おばあちゃんは？」

木村「里美は、両親は里美が小学校のときに  
離婚してて、お母さんに引き取られたんや  
けど、お母さんはありさちゃんが五歳の時  
に亡くなったんや。お父さんとは今は全然  
会つてへんらしい」

美津子「ありさちゃんのお父さんの方のおじ  
いちゃんおばあちゃんは？」

木村「九州にいるらしいし、年に一回ぐらい  
は会いに来とるらしいけど：：：」  
美津子「そう：：：」

### 143 電車・内（夜）

ありさと里美が座っている。

空席はない。立っている乗客もいる。

里美「梅田でなんか食べて帰るか」  
ありさ「うん」



ありさと里美が座っている。

テーブルの上にコップが二つ。

里美「楽しかった？」

ありさ「うん」

里美「そう、よかった。おじいちゃんとおばあちゃん好きになれそう？」

ありさ、大きくうなずく。

ありさ「そういえば、結婚したらどこに住むつもりなん？　もしかして京都のあの家に住むつもりなん？」

ありさ、里美の方をじっと見る。

里美、うつむいている。

里美「（顔を上げて）ありさ」

ありさ「なに？」

里美「ほんまはもっと後になってから言うつもりやったんやけど、お母ちゃんありさが小学校卒業したら京都で住も思ってるんや」

ありさ「それまでは？」

里美「今の家で三人で住も思う」

ウエイトレスが料理を運んでくる。

ウエイトレス「お待たせいたしました」

ウエイトレス、カレーうどんをありさの前に、まぐろとろろ丼を里美の前に置く。

ウエイトレスが去ると、ありさ、里美、料理を交換する。

ありさ「まぐろとろろ丼食べる小学生もおると思うけどなあ……」

ありさ、里美、黙々と食べ始める。

ありさ「すぐに京都へ行ってもええよ」

里美「えっ？　けど……」

ありさ「転校なら別にかまへん。友達なんて自然にできるもんやと思っとる。友達作りたいたいか、どっかのグループ入らなとか、強う思つとるとかえっておかしくなって友達できひんようになる気がする。けどお母ちゃんの仕事どうすんの？」

里美「どっちにしても辞めるつもりなんや。」

結婚して同じ職場におるんはようないし、それにこれからは家のこともうちよつとせんとな。今までありさに頼りきってたし」

ありさ「そんなんはええけど……」

里美「なんかパートでも探すわ。それより、ほんまに転校してもええん？」

ありさ「うん。けど一つだけお願いがあんねん」

里美「なに？」

ありさ「(まっすぐ里美の方を見て) 阿倍野の家は絶対売らんといてほしい！」

145 鈴木家・居間(夜)

ありさ、パソコンを見ている。

画面に松虫から山科までの公共交通機関を使ったルートと金額が出ている。

ありさ「大人で一一七〇円か……こっちは天王寺まで歩いて、阪急使<sup>つ</sup>て行<sup>つ</sup>て向<sup>つ</sup>こうは河原町まで車で送り迎<sup>つ</sup>えしてもろたら……」

ありさ、パソコンの画面の出発地に「梅田」到着地に「河原町」と入れる。

ありさ「大人で四百円。天王寺から環状線使<sup>つ</sup>たら梅田まで百九十円で行けるし片道五百九十円。子供は半額やから往復で大体六百円。月四回で二四〇〇円か……ちよつときついなあ……月二回が限度かなあ……」

物音。ありさ、パソコンの画面を消して閉じる。

パジャマ姿の里美が入ってくる。

里美「あんたまだ起きとったん？」

ありさ「うん。ちよつとインターネットしてた。もう寝る」

里美がありさの前に座る。

里美「なあ、ありさ」

ありさ「なに？」

里美「ごめんな、私のわがままであんたを振り回して」

ありさ、微笑む。

ありさ「そんなこと気にしとったん？ お母ちゃんは今まで苦労してうちを育ててくれ

たんや、結婚して幸せになるんやったらうちも嬉しい」

里美「ありがとう」

里美、ありさ髪のを優しくなでる。

146 鈴木家・居間（朝）

ありさがランドセルを背負う。

147 同・玄関（朝）

ありさが靴を履いている。

里美が奥から現れる。

里美「ありさ、今日、帰り少し遅くなるんやけど」

ありさ「わかった」

里美「荒瀬君に来てもら……」

ありさ「一人で大丈夫や」

里美「……」

ありさ「行ってきます」

ありさが外に出て行く。

148 ××アパート荒瀬の部屋・内（夜）

荒瀬がテレビを見ている。

テーブルの上の携帯電話が鳴る。

荒瀬、携帯電話を取る。

荒瀬「もしもし」

里美の声「ごめんな、遅くに」

荒瀬「いや。どうした？」

里美の声「ありさと最近会った？」

荒瀬「いや」

里美の声「そう……」

荒瀬「なんかあったんか？」

149 鈴木家・里美の寝室（夜）

里美が携帯電話を手をしている。

里美「うん……この間話の流れでありさが小学校卒業したら京都へ住も思える言うたら、あの子、すぐに引っ越してもええって言いだして……最近あんまり元気ないし、荒瀬君にも会いに行っていないみたいやし……ちよっと気になって……」

荒瀬の声「ありさなりにいろいろ考えてんの  
ちゃうか。新しいお父さんに気を使ってる  
んかもしれんし……」

里美「うん……私が聞いても何も言うてくれ  
へんし……もし、荒瀬君のどこに行ったら  
それとなく聞いてもらえへんかな思て……  
ごめん、いつも甘えて……」

150 ××アパート荒瀬家・内（夜）

荒瀬、携帯電話を手にしている。

荒瀬の声「それはええけど、もつとふさわし  
い人がおるんちゃうか？」

151 鈴木家・里美の寝室（夜）

里美が携帯電話を手にしている。

里美「もつとふさわしい人……？」

152 阿倍野・道（夕）

ありさが歩いている。

153 公園・前（夕）

ありさが公園のベンチを見ている。

154 ありさの回想・公園（夕）

荒瀬がベンチに座り、競馬新聞を手に  
赤鉛筆で馬の名前の所に印を付けてい  
る。

ありさがベンチの後ろからゆつくりと  
荒瀬に近づく。

ありさ「おっちゃん！」

荒瀬、びっくりした顔で振り向く。

荒瀬「おう。お前か」

ありさ、荒瀬の隣に座る。

ありさ「この間の菊花賞、当たったはずやで。  
一万四千元」

荒瀬、ちよつと慌てた様子で、

荒瀬「いや、あれ、時間がなくてかけられへ  
んかったんや」

ありさ「おっちゃん！」

ありさ、ポシエットから手帳とボール

ペンを取り出す。

ありさ「一万四千円追加。利子入れて合計八万七千五百四十二円の貸しと」

荒瀬「おいおい……」

ありさ「どうせまたパチンコでもやって使い込んだんやろ」

回想終わり

155 公園・内（夕）

ありさが座っている。

ひざの上に開かれたままの雑誌。

156 同・前（夕）

ありさが歩いていく。

157 阿倍野・道（夕）

ありさが歩いている。

前から荒瀬が歩いてくる。

荒瀬「おう！ 久しぶりやな」

ありさ「……」

荒瀬「日曜ダービーやぞ。かけへんのか？」

ありさ「もう競馬はやめた。お金かせぐ必要

なくなっただし……」

荒瀬「そうやな。小学生がするもんちやうな。

けどお前、お金のためだけにやってたん

か？」

ありさ「……」

荒瀬「ちやうやろ？ 馬が好きで、好きな馬

を応援したり、どの馬が勝つのか予想した

りするのが楽しくてやってたんちやうんか？

お金かけるんはようないけど、予想したり

するんは別に小学生でもええやろ」

ありさ「けど、京都に引越すし、おっちゃん

んに頼めへんようになるもん」

荒瀬「予想は京都でもできるやろ。それに電

話やメールがあるやろが」

ありさ「けど……」

荒瀬「俺とありさは友達違たんか？ お母ち

ゃんや新しいお父ちゃんのこととは関係ない

と思うけどな」

ありさ「……」

荒瀬「まだこつちにおるんやろ？ また弁当  
作って持ってきてくれや」

荒瀬、ありさの頭を軽くなでると、あ  
りさの横を通り過ぎて歩いていく。

158 鈴木家・ありさの部屋（夜）

ありさが勉強をしている。

ありさ、鉛筆を動かす手を止める。

159 ありさの回想

荒瀬の声「俺とありさは友達ちごたんか。お  
母ちゃんや新しいお父ちゃんのこととは関係  
ないと思うけどな」

回想終わり

160 鈴木家・ありさの部屋（夜）

ありさ、鉛筆でノートに書き始める。

161 ××小学校・全景（夕）

チャイムの音。

162 鈴木家・前（夕）

ありさが鍵を開けて入っていく。

163 同・玄関（夕）

男物の革靴。

ありさ、それを見て少し警戒した表情。

奥から木村が現れる。

木村「おかえり。ごめんな。びっくりさせた  
かな」

ありさ、小さくうなづく。

ありさ「ただいま……」

木村「お母ちゃん、急に仕事が入ったんや。

ちよつと遅なるて」

ありさ「そう」

ありさ「木村さんは仕事は？」

木村「僕は昼からお休みもろたんや」

164 同・居間（夕）

木村がテレビを見ている。

ありさ「部屋に入ってくる。」

木村「宿題終わった？」

ありさ「うん」

木村「夕飯、何が食べたい？」

ありさ「……お好み焼き」

木村「お好み焼きか……じゃあ一緒に作るか」

ありさ「うん」

木村「じゃあ、まずは買出しやな」

165 ××スーパー・内（夕）

ありさと木村が商品を見ている。

木村、キャベツをカゴに入れる。

木村「次は肉やな」

ありさ「肉なら家うちにある。この間すじ肉を煮

込んでそれを冷凍してたやつがある」

木村「すじ肉の下処理をしたん？」

ありさ「簡単やん。時間はかかるけどほとん

どほつといたらええんやし……」

木村「せやけど……」

ありさ「まとめて下ごしらえして冷凍しとい

たら要るときに使えるやんか。お好み焼き

の他にもカレーとかうどんとか……冬やつ

たらおでんに入れてもええし」

木村「じゃあ冬になったらみんなでおでん食

べよか。京都のおじいちゃんもおばあちゃ

んもおでん大好きなんや」

ありさ「うん。うちが作ったる」

166 鈴木家・居間（夜）

テーブルの上にお好み焼きののったホ  
ットプレート。

ありさ、ヘラでホットプレートの上の  
お好み焼きをちよつとだけすくつて上  
にあげる。裏を見ると茶色い焼き色が  
ついている。

ありさ「そろそろひっくり返してもええかな」  
ありさ、もう一つヘラを持って両側か  
らお好み焼きを救い上げて一気に裏返  
す。きれいに裏返る。

木村「うまいなあ」

ありさ「（へらを木村に渡し）はい」

木村、へらで好み焼きの端をすくって裏をチエックする。その後一気にひっくり返す。端の方がちぎれて裏返ってない。

ありさ「（笑いながら）あくあつ」

木村「ソース塗ったらわからへん」

木村、ちぎれたところを裏返してポンポンと軽くへらでたたく。

× × ×

ありさがお好み焼きにソースを縫っている。

木村がかつぶしと青海苔をかける。

木村「じゃあ、食べよか」

ありさ「うん」

ありさ、木村、お好み焼きを食べる。

ありさ「おいしい！」

木村「大阪の人の家にはたこ焼き器があるて聞いたけどありさちゃんともあるの？」

ありさ「うん。京都はちやうの？」

木村「持つとる家もある思うけど大阪みたいなどの家にもあるわけちやうなあ。家うちもないよ。ありさちゃん家は家で作ったりすんの？」

ありさ「たまにやな。お母ちゃんと二人やつたらする気にならんし」

ありさ、木村、お好み焼きを食べる。

木村「お母ちゃんが遅いときは荒瀬さんが来てくれてたん？」

ありさ「うん。いつもちやうけど。最近は一人で留守番することの方が多いし」

木村「そういえば最近あんまり荒瀬さんに会ってへんのやて？」

ありさ「…うん…」

木村「僕に気を使ってるの？」

ありさ「そういうわけちやうけど…」

木村「ありさちゃんは荒瀬さんにお父ちゃんになつてほしかったんやろ？」

ありさ、うつむいている。



木村「ええよ、気にせんでも。正直に言うてくれてええんやで」

木村、ありさに近づき、ありさの頭に手を置く。

木村「ごめんな。でも、僕とお母ちゃんが結婚しても、ありさちゃんは今会いたいときに荒瀬さんとおうたらええんやで。つていつても京都に行ったら今までみたいに簡単に会えへんかもしれへんけど、ありさちゃんのが会いたいのには荒瀬さんと会うの我慢するなんて、それじゃ不公平や。お母ちゃんと僕は自分のやりたいようにして、ありさちゃんばかりが我慢するなんておかしいと思わへん？」

ありさ「でも、いい気しいひんやろ？」

木村「そりや、気にならへん言うたら嘘になるけど。でも僕も何か我慢せな不公平やろ？　そうとちやう？」

ありさ「うん、そうかもしれへんけど……」

木村「ありさちゃんは今子供のころから荒瀬さんと仲良しやったんやろ？　僕はこの間はじめて会ったばかりや。これからゆっくり家族になってきたいと思つとる。それと荒瀬さんのことは別や。荒瀬さんとありさちゃんは今友達なんやろ？　友達とは会いたいときにおうたらええんちやう？」

ありさ「（顔を上げて）ええの？」

木村「もちろんや！」

ありさ「ありがとう。ほなそうする。おつち

やんとは今まで通り会いたいときに会う」  
木村「それと、ほんまに京都へ行ってもええん？　別にこつちにおりたかつたら中学もこつちでもええんやで。それに中学入るんはまだまだうちよつと先やし、とりあえずこつちにおつた方がええんちやうの？　無理せんでも……」

ありさ、首を横に振る。

ありさ「無理してんのちやう。それはうちがそうしたいと思て決めたことや」

木村「そう。それやったらもうなんにも言わ

へん」

ドアの開く音。

里美の声「ただいま」

ありさ「お母ちゃん帰ってきた」

木村「お好み焼きの用意しようか。お母ちゃ

んお腹すかしてるで」

ありさ「そうやな」

167 同・台所

ありさがオーブンレンジからココアカ  
ステラを取り出す。

168 建設中の家・庭

荒瀬と丸山、迫田が高所で大工仕事を  
している。

ありさが紙袋を手に歩いてくる。

ありさ、荒瀬の方を見上げて、

ありさ「おっちゃん！」

荒瀬、ありさの方を見て微笑む。

ありさ「お菓子持ってきたたで」

丸山「ありさ、久しぶりやな」

× × ×

カステラを手にありさ、荒瀬、丸山、

迫田が木材に腰掛けている。

迫田「おいしいやん、これ。ほんまにありさ  
が作ったんか？」

ありさ「うん。新しいおばあちゃんに教えて

もろたんや」

迫田「そうか……」

荒瀬「けどおまえ前にチョコレートのカステ  
ラ食べた時じやどうや言うてなかったか？」

ありさ「ちよつとかっこつけてただけや。別  
においしな思たわけとちゃう。けどもう  
かっこつけるんはやめたんや。それにこれ  
はチョコレートのカステラちよ違ってココアのカ  
ステラやで。あつ、それとおっちゃん、邪  
道の邪って蛇ちゃうよ」

169 ありさの回想・お好み焼き屋・内（夜）

ありさと荒瀬がテーブル席に座って

る。二人の前にお好み焼きとやきそば。  
ありさ、お好み焼きにマヨネーズをか  
けようとす。

荒瀬「そういうのじゃどうって言うんやで。  
マヨネーズの味でお好み焼きの味がわから  
んようになるやろが」

ありさ「じゃどう？」

荒瀬「あんまりせんほうがええ食べ方したと  
きなんかに言うんや。蛇の道って書いてじ  
やどう」

ありさ「なんで蛇なん？」

荒瀬「そんな知らんわ。家で自分で調べろ  
や」

荒瀬、お好み焼きを口に持っていく。

170 元の建設中の家・庭

荒瀬「そうなんか？ どんな字書くんや？」

ありさ「邪魔の邪」

荒瀬「じゃまのじゃ？」

ありさ「家で調べとき」

荒瀬「相変わらずかわいがないガキやなあ」

荒瀬、携帯電話を取り出してメモ帳の  
画面を開くと「じゃま」と打ちこむ。  
「変換」を押すと「邪魔」と出る。

迫田、丸山が荒瀬に近づく。

丸山「こんな字書くんか……」

ありさ「(荒瀬に)一つ勉強になったやろ」

荒瀬「うるさいわ」

荒瀬、ありさの髪の毛をくしゃくしゃ  
にする。

ありさ「もう！」

ありさ、くしゃくしゃになった髪の毛  
を手で真っ直ぐに直す。

ありさ「なあおつちゃん、お願いがあんねん」

荒瀬「(ペットボトルを口から離し)なんや？」

ありさ「うち、お母ちゃんと新しいお父ちゃ  
んに新婚旅行をプレゼントしたいねん」

荒瀬「旅行？」

ありさ「うん。二人とも式もせえへん、旅行  
も行かへんって言っとるし温泉旅行でもプ

レゼントしよ思て。一泊二日ぐらいやった  
ら休み使つこて行けるやろ」

荒瀬「で、貯まっとる金払えってか」

ありさ「そんなん払ってもらおと思てへんわ」

荒瀬「ええんか。ラツキー」

ありさ「（真顔で）ええよ。あげる」

荒瀬「∴頼みってなんなんや？」

ありさ「別に大したことちゃう。旅行の間、  
うちに泊まりに来てほしいんや」

荒瀬「それはええけど、ありさは行かへんのか？」

ありさ「ええんや。せやかて新婚旅行やで。

それこそ邪魔もんにはなりたないわ」

171 鈴木家・外観（朝）

車が走ってきて、道路にいた雀が舞い  
立つ。運転席に木村の姿。

172 同・玄関（朝）

パジャマ姿のありさが立っている。

里美が靴を履いている。

里美「ほんまにありさは行かへんの？」

ありさ「うん」

里美、キャリアバックを持つ。

里美「じゃあ、行ってくるわ。ありがとね、  
ありさ」

ありさ「うん。行ってらっしゃい」

里美、ドアを開けて外に出て行く。

173 同・居間（夜）

テーブルの上に食べ終わった食器。食  
べものは何ものっていない。

テレビでは阪神タイガースの試合。

荒瀬がタバコを吸っている。

ありさがそれを見ている。

ありさ「美味しかった？」

荒瀬「ああ、うまかったで」

荒瀬、煙を吐き出すと、灰皿にタバコ  
を置いてテレビの試合をじっと見る。

ありさ、タバコを手に取り、口に持つ

ていく。  
咳き込むありさ。荒瀬がそれに気づいてありさの方を見る。

荒瀬「おい、何やってんのや」

ありさ「タバコの箱を手取る。

ありさ「こんなんのどこが美味しいんや」  
荒瀬、箱を取り上げる。

荒瀬「子供にはわからん」

アナウンサー「××（ピッチャーの名前）、第三球を投げました」

阪神タイガースのユニホームを着たピッチャーがボールを投げ、バッターがボールを打つ姿がテレビの画面から流れる。

荒瀬がテレビを見る。

ありさがテーブルの上のリモコンを手取る。

アナウンサー「風にのってボールが伸びる、伸びる、ホームランか、ファウルか……」

画面がお笑いの番組に変わる。

荒瀬「おい、何するんや！」

ありさ「お笑い見たいんやもん」

荒瀬「ええとこやったのに。リモコン貸せ」

荒瀬、リモコンを取ろうとする。

ありさ「いやや」

逃げるありさ。

荒瀬「お前も大阪人なら一緒に阪神タイガース応援せえや」

荒瀬、ありさからリモコンを取り上げる。

ありさ「競馬と違って金にならへんのに応援なんかしたないわ」

荒瀬「（ため息をついて）おまえなあ」

ありさ、荒瀬からリモコンを取る。

荒瀬「おい！」

ありさ「嘘や。うちかてタイガースは好きやけど、今はお笑いや！」

荒瀬「ったく……」

荒瀬、テレビのところに行き、チャンネルを野球に変える。

荒瀬「ハハハ。リモコンなくてもチャンネルは変えられるんや」

ありさ「おっちゃんアホか」

荒瀬「はあ？」

ありさ「試合終わってんで」

荒瀬、テレビを見る。

相手チームの選手がインタビュウを受けている姿が画面に映っている。

アナウンサー「××（選手の名前）のスリー

ランホームラン、すごかったですね」

荒瀬「ああ。逆転負けや！ くそ！」

荒瀬、立ち上がる。

荒瀬「チャンネル変えてもええで。俺はシャワー浴びてくる」

荒瀬、ドアのほうへ向かって二、三步歩く。

ありさ「おっちゃん」

荒瀬、振り向く。

ありさ「ごめんな」

ありさ、じっと俯いている。

荒瀬、ありさに近づき、体をかがめる。

荒瀬「えらいしおらしいな」

ありさ「……」

荒瀬「まあ、負ける瞬間なんて見たなかったしな。それよりありさ明日競馬場付き合え」

ありさ「（顔を上げて）えっ！」

荒瀬「明日の宝塚記念、予想しとけ。当たったら許したる」

ありさ「おっちゃん競馬場連れてってくれんの？」

荒瀬「ああ」

ありさ「（嬉しそうに）ほんま？」

荒瀬「ああ。お前、競馬場行きたいって言うとったやろ」

ありさ「（荒瀬に飛びつき）ありがとう、おっちゃん」

荒瀬「（微笑んで）いちいちおっちゃん言うな」

荒瀬がスポーツ新聞を読んでいる。  
足音が聞こえて新聞を閉じる。

荒瀬 「おう、用意できたか？」

ワンピースをありさが入ってくる。

荒瀬 「なんやそれ。(吹き出して)お前、競馬場行くのにそんな服着ていくんか？」

ありさ 「あかんの？」

荒瀬 「あかんことはないけど……(笑って)普段のズボンにTシャツの格好の方が競馬場にはおうとるやろ。何も競馬場にオシャレしてかんでも……」

ありさ、笑っている荒瀬に座布団を投げつける。

荒瀬 「お前なあ……」

荒瀬、ありさの方を見る。ありさが今にも泣きそうな顔をしている。

ありさ 「着替えてくる」

ありさ、荒瀬の横を通って部屋を出ようとする。

荒瀬 「ありさ」

荒瀬がありさの腕を取る。体をかがめて視線を合わせる。

荒瀬 「俺が悪かった」

ありさ、俯いている。

荒瀬 「そのワンピースよう似合おてんで」

ありさ 「今更遅いわ」

荒瀬 「着ていききたかったらそれでもええけど、今日はすごい人やで。汚したらあかんし、動きやすい服のほうがあええやろ？ その服はお母ちゃんとお父ちゃんと食事に行くときのためにでもとつとき」

ありさ 「この間もう着て行ったわ」

荒瀬 「そうか……」

ありさ 「どうせうちは女らしいし、美人とちゃうし……」

荒瀬 「お前誰の子供や？」

ありさ、顔を上げる。

荒瀬 「あの二人の子や、きつと後五年もしたら美人になる」

荒瀬、その場に座り、ありさの手を取

って座らす。

荒瀬「お前、お父ちゃんのこと覚えてるか？」  
ありさ「（首を横に振って）ほとんど覚えて  
へん。写真あるから顔は分かるけど……」

荒瀬「せやろな。マサが事故に合ったのはお  
前が三歳の時やったしな」

ありさ「お父ちゃんって、どんな人やったん？」

荒瀬「ええ男やったで。かっこよくて、勉強  
もスポーツもできて、それでいてつんけん  
したところが全然なくて、俺らみたいな奴ら  
とも一緒にアホなこと言うて騒いだりもし  
て、俺の自慢の友達やった。せやし、お母  
ちゃんとマサが付き合って結婚したのは俺  
もほんと嬉しかったんや」

ありさ「お母ちゃんのこと好きやったんや  
ろ？」

荒瀬「まあな。でも、好きって言うより憧れ  
てたって感じやったし、何よりおかあちや  
んとお父ちゃんと三人でおるんが好きやつ  
たんや。分かるかありさ」

ありさ「（うなづいて）なんとなくやけど」

荒瀬「お前が生まれたときも自分の子供が生  
まれたんとちやうかっていうぐらい喜んだ。  
マサが死んで……あの二人の子どもやしお  
前の面倒もみたんや」

荒瀬、ありさの両肩を軽く両手で掴む。

荒瀬「お前はええ子に育った。俺は天国のお  
父ちゃんにそう自信持って言える」

ありさ「おっちゃん……」

荒瀬「俺、前に言うたな、自然体が一番やつ  
て。お前は俺の自慢のあの二人の子供や。  
そのうち自然に女らしなるし、美人にもな  
る。世界中の男がありさのことほっとかへ  
んぐらいええ女になる。俺が保証する」

ありさ「おっちゃんもか？」

荒瀬「えっ？」

ありさ「おっちゃんもうちのことほっとかへ  
んようになるんか？」

荒瀬「それはそのときになってみんと分から  
んな」



ありさ「うそつき！」

ありさ、荒瀬に背を向けてドアの方へ歩いていく。

荒瀬「ありさ！」

ありさ、振り向いて微笑む。

ありさ「いつもの服に着替えてくる」

ありさ、部屋を出ていく。

175 阪神競馬場・観客席

人で溢れている。

176 同・トラック

歓声。

馬たちが走っていく。

177 同・パドック

馬が調教師に連れられて順番に歩いていく。

それを上から見ているありさと荒瀬。

ありさ「おっちゃん九番の馬落ち着いてるし毛並みもきれいやで」

荒瀬「そうか？ それより十二番の方が落ち着いてんで」

178 同・馬券売り場

機械の前にたくさんの人が並んでいる。

その中にありさと荒瀬。

荒瀬の番になり、荒瀬、お金を機械に入れる。券が機械から出てくる。

179 同・スターター席

スターターが旗を振る。

ファンファーレが鳴る。

観客席から歓声。

180 同・ゴール前観客席

たくさんの人の中、ありさと荒瀬が立っている。歓声と手拍子。

181 同・トラック

馬たちが一斉にスタートする。

182 同・ゴール前観客席

たくさんの人。

馬がゴールの方に向かって走って走ってくる。  
荒瀬がありさを持ち上げて、顔の高さ  
ぐらいまで抱き上げる。

ありさ、何か叫んでいるが、周りの歓  
声で聞こえない。

183 同・トラック

馬が二頭走ってきて、首差ぐらいで一  
頭がゴールする。

184 同・ゴール前観客席

荒瀬がありさを地面に下ろす。

ありさ「(荒瀬を見上げ) ありがとう」

185 大阪阿倍野・道(夜)

ありさと荒瀬が歩いている。

荒瀬「せつかく最後やのに負けてしてもて残念  
やったな。最後ぐらい勝ちたかったやろ」

ありさ「まあな。でも別にそんなんええんや。

それにそんなん気にして勝つまでとか思て  
やつとるとどんどんお金使ってまうやろ？

おつちゃん覚えあるんちやうか？」

荒瀬「ま、まあな……」

186 道〱鈴木家 前(夜)

ありさと荒瀬が歩いてくる。

家の前でありさが足を止める。

じつと家を見つめるありさ。

荒瀬がそつとありさの方を抱く。

ありさの目から涙が零れ落ちる。

ありさ「うち、京都へなんか行きたない！ 阿

倍野におりたい」

荒瀬「京都なんかすぐや。一時間ちよつとで  
行ける」

ありさ「そんなん遠いわ。弁当が腐ってまう」  
荒瀬「京都には競馬場があるで。G1レース

もいつぱい見られるで」

ありさ「一人で行けへんし、馬券かて買えへんねやから意味ないわ」

荒瀬「俺が連れてつたるがな。京都までありさに会いに行つたる」

ありさ「おっちゃん……」

ありさ、荒瀬のお腹に顔を埋めて涙を流す。

荒瀬、ありさの頭をなでる。

荒瀬「ありさもまた大阪に遊びに来たらええやろ。今度は漫才でも一緒に見に行こや。

そんなときはあのワンピース着てこい」

ありさ、顔を上げて荒瀬の顔を見る。

ありさ「そやな。おっちゃんの借金も取り立てに來なあかんしな」

荒瀬「あれはもうええん違たんか？」

ありさ「そんなこといつ言うた？」

荒瀬「お前、この間言うたやないか」

ありさ「そんなん忘れた」

荒瀬「ええ？」

ありさ「せやかて、おっちゃんの借金帳消しにしたら取立てに來られへんやん」

荒瀬「ほなしばらく返さんとくわ」

笑い合うありさと荒瀬。

ありさ「おっちゃん」

荒瀬「なんや？」

ありさ「おっちゃんはずっと阿倍野におってな」

ありさが家の鍵を開け、荒瀬と一緒に入っていく。

187 鈴木家・前

「一カ月後」

不動産屋のトラックが前に止まってる。その横にありさと里美。

里美「(車の中のドライバーに)よろしくお願ひします」

車を見送るありさ、里美。

ありさと里美が立っている。  
ありさが何もなくなった部屋を見渡す。  
ブザーの音。

ありさ「あつ、来た」

189 同・玄関

荒瀬が立っている。

ありさと里美が荷物を手に現れる。

里美「ごめんな。仕事大丈夫なん？」

荒瀬「大丈夫や。職場のみんなもよろしくつて言うと思ったわ」

荒瀬、ありさと里美の荷物を持って外に出る。

190 同・前

××建築会社と書いた車が止まっている。

荒瀬が車の中に荷物を入れる。

ありさと里美が家の中から出てくる。

里美が鍵を閉める。

ありさ「（笑いな）おっちゃん、もうち

よつとシヤレた車はなかったんかいな？」

荒瀬「うるさいな。送ってもらうのに贅沢言うな」

ありさ「誰も頼んでへんやん」

荒瀬「口の減らんガキやなあ」

ありさ、建物を見上げる。

ありさ「うち、大きかったらここへ戻ってくる」

里美、背後からありさの両肩に手をかける。

ありさ、振り返って里美の顔を見て微笑む。今度は荒瀬の方を見て、

ありさ「おっちゃん、それまでちゃんこの家の留守番頼んだで」

荒瀬「おう」

里美「ごめんな荒瀬君やっかいなこと頼んで」

荒瀬「いや、こっちも家賃助かるし」

ありさ「金貯めんと嫁の来てがないもんな」

荒瀬「うるさいな。ごちやごちや言つとらん

とはよ乗れや」

ありさ、笑みを浮かべながら車の中に入る。

191 天王寺駅・改札口

自動改札機の前にありさと里美、荒瀬が立っている。

荒瀬、ありさに荷物を渡す。

ありさ「ありがとう」

荒瀬「元気だな」

ありさ「なあ、おっちゃん！」

荒瀬「なんや？」

ありさ「あと五年半は結婚したらあかんで！」

荒瀬「えっ？」

ありさ「うちが嫁にいったるから……」

荒瀬、微笑む。

ありさ「まあ、おっちゃんのとこに嫁にくる

物好きなんて他におらんやろけどな」

荒瀬「アホ！」

ありさ、微笑む。

荒瀬「お前がお母ちゃんより美人になつとつ

たら嫁にもろたるわ！」

ありさ「楽勝や！ その頃にはお母ちゃんよ

りずつと美人になつてんで！ お母ちゃん

は四十四や。もう肌はガタガタや！」

ありさと里美、顔を見合わせて微笑む。

荒瀬「あんまり期待せんと待つとるわ！」

里美「じゃあ、荒瀬君ほんといろいろありが

とうな」

荒瀬「いや。じゃあ」

ありさと里美が改札機を通る。

ありさ、振り向く。大きく荒瀬に手を

振る。

ありさ「バイバイおっちゃん！」

荒瀬「おう、またな」

軽くありさに手を振り返す荒瀬。

ありさ、前を向いて里美と歩いていく。

ありさと里美の後姿をじつと見つめる

荒瀬。